

婦人子ども



大正四年九月五日

第十五卷
第九號



フ
レ
ー
ベ
ル
會

第十五卷第九號目次

幼稚園教育の特色

倉橋惣三

幼稚園と自然

三田谷 啓

幼稚園に於ける數の取扱に就て

望月 くに

幼兒觀察記

野田 千代

菊ちやんの舞踊會

岡田 みつ

摘 錄

○フレイベル氏の九原則を評す(高島平三郎氏)——幼稚園

園保育の陥り易き弱點及其起因(大阪市保育會調査委員)

雜 錄

フレイベル追懷錄

本誌定價

一冊 郵稅共金拾壹錢 六冊前金郵稅共六拾錢
拾二冊同金壹圓貳拾錢 郵券代用 一割増

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ
込み下さい。直に送本致します。(振替口座東京一七二六六
番)

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

(庶務上保姆紹介に關する件を含む)の御手紙は

東京市小石川區久堅町七十四番地フレイベル會事

務所宛 會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、

雨森劍宛 本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下代々

大正四年九月一日印刷
大正四年九月五日發行

編輯兼發行者 倉橋惣三
東京府豊摩郡代々幡村大字代々木山谷一二四

印刷者 東京市本所區番場町四番地 登
東京市本所區番場町四番地 井

印刷所 東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 東京市小石川區久堅町七十四番地
フレイベル會

幼児教育の特色

(京阪神聯合保育會に於ける講演概要)

倉橋惣三

元來我國は、教育の方面に於いては、何う云ふわけか、外國の思潮に動かされることが急で、教育上の思潮が始終いろ／＼に動搖して居るやうであるが、其の間に在つて、幼児保育の方面だけは可なり長い間、議論もなければ變化もないといふ風に、謂はゞ呑氣な長夜の眠をして居たのでありました。それが近來になつて急に忙しく目を醒して來たのである。其の爲に急にいろ／＼の論や説が出た。之れは實に結構な大に喜ぶべきことであつて、茲に初めて進歩があるのである。或は新しい説に動かされては可ん、いろ／＼な考に動搖しては可ないと云ふことは、老成大家の御説であるけれども、併し何か深く徹底した結論に達しやう

とするには、當分の間は多少の動搖は免れないことである。一方の思ふ所に突進して見る、すると今度は又それとまるで矛盾して居るやうな、反對の方面に曲折して行くと云ふやうなことは、研究の途中としては當然起ることである。小さく纏りのついた、いゝ加減な結論に基いた保育には、吾吾は永い間飽き／＼して居つたのである。近來の如く活潑な研究が、續々出ると云ふことは、やがて是が本當の大なる結論に落付く所の途筋であらうと、私は確信し且つ期待して居るのである。何うか三市保育會、或は全國の保育會の方々が、まだ十年や二十年、結論に達しないでも少しも構はないのでありますからして、存分いろ／＼な方面

に意見を選ばれ、又主張の旗印もいろいろに立てられて、御遠慮なしに互に研究せらるゝことを希望するのである。

併しながら是は研究である。吾々がいろいろ新しい教育主義に接して、新しい學説を受取つて。それに向つて殆ど極端なる程の意見を構成して見る。而して何處まで此意見が徹底するのであるか深く穿鑿して見ると云ふのが、是れ即ち研究の態度である。研究の態度は何處までも最も自由なるべきである。併し其の自由なる研究の中にも、其の問題の特色として一定の大方針はあるものだろうと思ふ。勿論此の大方針も、もとは研究の結果に基づくもので、どこからも獨斷的に與へられるものではないが、何か大體の方針となる處のものがなくては、個々の研究が極めて亂雜に不統一になつて仕舞つて、遂に其の末の爲に、其の大本を忘れるといふ様な弊が起りはしないかと思はれる。即ち幼稚園教育にはいろいろの主義もあり、方法

もあるけれども、それが幼稚園教育である限りは脱越することの出来ない一定の範圍がある筈だと思ふのである。私は今日、そのことに就て申上げて見たいと思ふのである。但し、斯ういふことは餘り細かになると、却つて大方針としての自由なり餘地なりを失ふ様になるから、成るべく大體に止まつて、しかも基本となるものでなければならぬと思ふ。又、私の今日申し上げることは、何も保育の流義を一定にきめて仕舞ふといふものではない。寧ろ、あらゆる保育の方法を包含し居る筈のものである。たゞ保育が保育である以上、斯ういふ方針のもとに考究せらるべきものだといふことをあらはすものである。

私は他の教育に比較して、幼稚園教育の特に特色とする處が四つあると考へて居る。其第一は幼稚園の教育は——外の教育に於ても、別に變つたことはないかも知れないが——特に幼児、即ち被教育者の自發的生活を尊重しなければならぬとい

ふことである。此事たる決して新しい問題ではない。既に幼稚園を初めたフレーベルが此點に注目したのである。のみならず、其れ以來幼児教育に就いて、いろいろ講究されて居るが、如何なる學說、如何なる新主義、如何なる新しい試みが行はれても、幼児の自發的生活を度外に置いて保育の方針を立てると云ふことは、昔も今日も無いのであつて、別に改めて申上げる程のことはないかも知れないが、幼児教育に幼児の自發的生活を尊重すると云ふ意味は、私の考へでは、二つの方面がある様に考へるのである。其の一つは保育の方法の形式の方面であつて、保育を有效に行ふためには自發的狀態を利用した方がよいといふのである。無理に注入するのでなく、成るべく幼児を自發狀態に置いて、それに向つて吾々の與へんとする所を巧く仕向けて行くと云ふのである。第二の考へは自發的生活を教育の手段の上に用ゆるのみでなく、幼児の自發的生活其物が内容的に、非常に大切な

ものであると云ふのである。此二の點は極めて微細なやうであるけれど、充分明かにして置く必要のある大切な點ではないかと思ふ。今日いろいろの研究の教へる所に依れば、幼児の自發的生活の中に、吾々が之を適當に培養することに依つて、いろいろ立派なものに育て上げ得る所の、豊かな内容を有して居ると云ふことが益々明かになるのである。即ち幼児の自發的生活の中には、形が自發的であると云ふ以外に、充實した内容を有して居ることを知るのである。此點を吾々が利用してゆくと云ふと、自發に任せていろいろ豊かな教育をして行くことが出来るのである。之れは方法的の問題よりもモウ少し中身のある、深い意味のものであると思ふ。先年來此の自發とか自由とか云ふことが、大變に吾々を刺激して、束縛的、或は干渉的な保育方法に對して、成るべく自然なる自發に従ふ教育をしなければならんと云ふことが一の傾向として行はれるやうになつたが、それが

前に述べた方法の形式の上の意味のみに限られて
幼児の自發生活に含るゝ、内容方面について餘り
考へられて居ない觀のあるのは、未だ不満足に思
はざるを得ないのである。即ち大切なる其の自發
的生活の内容に對しては、吾々の注意が未だ充分
でないと云ふ感じを持つのである。若し果して然
らば幼児の自發的生活と云ふことを唯だ非干涉、
放任と云ふやうな方法上のこと、従つて消極的意
味に解釋して、満足するだけでは足りないのでは
ある。従つて唯だ干涉せずに幼児を放任して置く
と云ふ風なことは、決して幼児の自發性を尊重する
と云ふ教育の眞骨髓に達して居るものではないの
であつて、自發的生活の内容を尊重して、それを
利用して積極的に、幼児を教育して行くことと云ふこ
とも、自發的といふことの重要な一面であり、
吾々に取つて餘程重大なる仕事であることを感じ
なければならぬのである。

次にこの問題を方法的な方面へ移してくると云

ふと、幼児の自發的生活の内容を尊重し、之れを充
分發揮せしむる爲には、幼児をして充分相互的生
活をさせるのが、最も適當であるといふことにな
つて來る。元來相互的といふことは幼児教育の一
手段として、最も適當の途ではないかと思ふ。外
の教育では大人の方から教へなければならんこと
が澤山あるが、幼児教育に於ては相互的生活をし
て、それに依つて互に持つて居る所の、自發性の
内容に自由なる發揮の機會を與へ、之を鍛鍊し發
達せしめて行くことと云ふことは、最も適當ではな
かと思ふのである。是は普通の教育では大分困難
なことであつて、少くも之を教育と云ふ仕事の全
部と考へてやると云ふことは實に六かしいことで
ある。或は皆を集めて一齊に教へなければならん
こともあり、或は一人一人緩り話をした方が可い
こともある。斯う云ふことは殊に教授をする側の
教育になると、免れないことであつて、相互的の
教育を以て、教育の全部とすることは逆も出來な

いのである。併しながら、幼児教育に於ては、今申上げましたやうに特別に是れだけのことを興へなければならんと云ふ、教材の様なものはなく、唯だ幼児が現してくる所の自發的生活の内容を、一つでもよいから徒らに看過さないやうにするのが、幼児保育上の仕事であるとしたならば、幼児をして相互的の生活をせしめて、互に持つて居る所の自發的内容を鍛鍊し、活動せしめて行くと云ふやうな機會を充分に與へることが出來ると思ふ。但し幼稚園の教育は本來個人的なものだと云ふ論がある。幼稚園の教育で、大勢の幼児を寄せ集めて、社會的團體訓練をする様のことは早過ぎる。幼稚園の教育は要するに個人的のものであつて、幼児一人々々の自由な個性を尊重するに在ると云ふ論がある。併し之れと相互主義教育法とは決して反對も矛盾もしないのである。幼稚園は個人的教育をするものであると云ふことは、如何なる何う云ふことかと言ふと、即ち一人々々の個性を没却せ

ず、殊に一個の標準を以て劃一して仕舞ふ様のとをしないといふことである。即ち個人々々の個性を發揮せしむると云ふことに心を用ひなければならん。假令は一の仕事をして居る時に、一人が手を舉げれば皆が手を舉げる、號令を掛ければ皆が揃ふと云ふやうに、無暗に規律的教育をすることはいらんといふのである。處で斯ふいふ風に其個人々々の持つて居ります所の個性を、充分に自由に發揮せしめる爲には、教師中心よりは相互中心が適當だといふことは、明かなことである。個人的特性の發揮は、外の言葉に依つて言へば、先程の自發的生活と云ふものに歸著してくる。自發的生活を真に自發ならしむるには、教師が一人々々子供を引張つて行くと云ふことのみでは出來ない。どうしても同じ様なお互同志の生活の間に、自然に出來てゆくのである。此事は今日の家庭に於ても、充分に徹底して居ない。幼稚園へお願すると云ふことは、矢張先生にかゝりつきりで、面倒を見て頂

き度いと云ふ様な考へで居る。幼稚園へ行つて見た所が、先生が他所の子供は放つて置いて、家の子供だけ手を引いて遊んで居て下さつた、家の子供は實に仕合である。保育料を三人前位出してよゝいから何うか始終斯ういふ様にして頂き度い。といふ様な考への人が多い。幼稚園の先生達には然う云ふ馬鹿々々しい考を持つて居る方はないが、如何にして幼児の相互生活を充分發揮させようかといふことに就ては、まだ研究が充分でない様に思はれることもある。

次に第三の特色は、幼児の生活を成るべく渾然として分割しないものにならなければならんと云ふことである。幼児に限らず凡そ人間の生活と云ふものは、いろいろな複雑な精神要素が適度に結合しまして、それが複雑なる形を以て、而かも其間に統一のある形を以て現れて來るものである。それを吾々が特別な方面に、或る一つの點だけ教育をすると云ふ様のことをするならば、折角統一の

ある。折角渾然と纏まつて居りまする處の心の生活を毀してしまふことになる。殊に多方面にして而かも統一あり、複雑にして而かも單一である所の、兒童の生活に對しては一層左様である。處が教育に熱心し力を盡すといふ場合には、どうも心の一方の點を特に注意して、その點にのみ偏つた發達をさせるといふことが尠くない。之れも程度の高い教育に於いては已むを得ない。殊に専門教育に於いては、或る方面に特別な力を用ふると云ふことは當然であるが、併し幼稚園の子供に對しましては、然う云ふ分割的教育をせねばならんと云ふことはいないのである。加之幼稚園の子供の、自發的生活の内容と云ふものは、決して今日は此方の方面、今日は彼方の方面と區分的に現れて來るものでなく、渾一した状態を以て現れて來るものであつて、複雑にして而かも統一ある形を以て現れて來る處に妙があるのである。心理學的に人間の生活を見て、感覺とか感情とか、意思とか云

ふのは研究上の抽象的分解であつて、之れをすぐに實際の教育に當嵌めて、そいふ分割的方法に於て兒童を教育して行かうと云ふのは、非常な間違であると思ふ。私は之を幼兒教育の具體性と申して居る。

次に第四の特色は、幼兒教育は概念的、觀念的でなく寧ろ情緒主義であるといふところである。元來吾々の心は情緒的方面から發達して、それが觀念として出來上つて來るのである。心の發達の初期にある幼兒の生活も亦、情緒的方面が主になつて居るのである。或は物の興味に就いても日常の生活に於いても、吾々は常に概念的な生活が加味して居るが、幼兒に於いてはどこ迄も、情緒的の生活が主になつて居ります。すなはち、その情緒を中心としてゆく教育が行はれなければならぬのである。

さて斯う云ふ風に自發的とか、相互的とか、具體的とか、情緒的とかいふ特色は、必ずしも幼稚園教育に限つた特色ではない。殊に現代教育の傾

向は餘程斯う云ふ風の傾向に向つて居るやうに見える。近頃いろ／＼な言葉を用ひて居る處の、兒童中心主義の教育、即ち子供を中心として行ふ教育は、言葉を換へていへば、形式及内容上に於ける自發的教育と云ふことになる。現に此頃いろ／＼な方面に行はれて居る所の、自發性の訓練即ち學校に於いても成るべく自治的觀念を興へなければいけないとか、社會的の少年團や、或は少年軍などいふ風に、自治的生活を授けなければならぬと云ふ主張が、近世的教育の色々な方面に行はれつつある。是はつまり一方では、相互的生活を尊重すると云ふことになる。或は又、多くの現代教育家が、吾々の實際生活から離れてしまつた教育は何もならん、唯だ抽象的智識の教育で、實際の生活とは何等の關係の無いやうな教育は何もならん、實際の生活と密接した教育でなければならぬと云ふ風に唱へて居る。それから又人間に對する教育の態度は、藝術的、美術的であつて、何も細かい方

法や技巧とするのではない、一のイスビレーションによつて、美的態度を生じ渾然として統一した働を以てするのであるといふ處の、美的教育と云ふものもつまりは一種の具體的教育であり、又情緒的教育である。斯くの如く教育と云ふことに就いては、最近いろ／＼な方面から細い研究が出来て居るが、殊に吾々の幼児教育にとつて、其の關係の深いことを見るのである。元來、幼稚園の教育は、一般教育學と少しも關係が無いといつた風であつて、小學校以上の教育にとつては、其時代に適切な學說等があつたが、幼稚園教育に取りましては適切な學說もなく、誠に心細い有様であつた。所が近來になつて、教育の傾向が觀念的、抽象的と云ふ方面から段々實際的、具體的となつて來て、幼稚園の教育に至極近いものになつて來た。のみならず幼稚園教育に於ては、其の學說の傾向が實に其の日常實際の仕事にピッタリ合ふことが出来る。而して或る一方から見ると、近頃

の學說と云ふものは幼児教育の爲に出來て居るやうにさへ見へるのである。

處で若も斯う云ふことが、幼児教育の特色であるとしたならば、吾々は幼児教育の實際に於ても研究に於ても、此の特色を破ることなく、之れに及ばざるなきと共に、超脱する様心しなければならぬと信するのである。處で若しも吾々が幼児の自發性を尊重せず、自發性の内容如何に顯著なく、自分の理想のみを以て幼児に對して行つてよいといふことならば、或は又幼児の相互的生活を以て適當に誘導して行くことをせず、自分の直接の指圖干渉で、幼児を保育してよいと云ふことであるならば、或は又幼児に一方面の生活をのみ發達せしめて、渾然たる統一的發達をさせんでもよいと云ふのならば、或は又單に觀念的、概念的の教育をして、其情緒全體に就て教育しないでもよいと云ふことであるならば、却つて保育の仕事に手掛も出來ようし、又其仕事に就て何とか成功す

ることも比較的容易かも知れないが、併し幼児教育と云ふものはそんな、容易なことではない。何の教育でも然うであるが、特に幼児教育は、前述べた處の特色を以て居るものであるから、甚だ六かしいことになる。いはゞ幼児教育者は、教育上の細かい技巧でなくして、此の教育の根本的理解と資格とからでなくては出来ないものである。

幼稚園と自然

自然を顧慮せられぬ幼稚園は到底失敗に終ることを免れませぬ。幼児の精神生活は自然であります。其自然の精神生活が外界の天然にまた深い關係を持つて居るのです。

林の中に小鳥が自由自在に樂しげに囀つて居る如く、幼児の精神生活は自由でそして自然であり

以上、別に新らしいことでもなく、誠に平凡なことであるが、私としては多少考へて居る點もあつて申し上げました次第である。此の簡單なお話も、諸君のお考へによつて、少しでも意味あるものにお聞きなし下さつたならば、此上もない幸である。

ドクトル 三・田 谷 啓

ます。不自然は幼児の精神生活を破るのです。幼児は砂を以て樂しく遊びます。花を持つて嬉ばしげに遊びます。これが幼児の自然である。そして大切な仕事なのであります。遊戯は無意味に戯れるのでなく、幼児の爲めには大切な仕事なのであります。

幼稚園教育の一大要點は幼兒を「自然」に一致して指導すると云ふことであります。この調和がよく保たれて初めて幼稚園教育の目的が達せられるのです。今二三の例を申せば此關係がよくわかります。

幼兒の身體の發育も精神生活も悉く自然の原則に従つて居るのである。自然の法則を破つて出ることとは出来ませぬ。お伽噺を好むのも自然である鳥や獸を好むのも自然である。この自然を顧みずして非自然を以て取扱ふときはここに衝突が生じて來る。この衝突が幼兒の精神生活を破るのである。

單に幼兒のみならず。成人も同じことである。自然に適合した生活は何より良い養生の法であります。不自然なことをするから病氣に罹り易くなるのであります。

幼稚園の可否に就て何や歟やと論ずる人がある。これは幼稚園其ものゝ可否にあらずして導く人の

如何によつて分かれて來る問題である、幼兒の精神生活に一致した保育であれば幼稚園存廢論などは出て來る筈はないと思はれます。

幼兒が天然を好むのは自然である。これをよく利用すればそこに調和が出来、教育の効果が現れるのであります。この意味に於て天然を幼稚園教育に用ふことは大切であります。

幼稚園教育に於てどれ丈け天然を利用し得るかと云へば、園外に於ける散歩等を別にして凡そ次の如きことを行ひ得るのであります。

一、お庭の遊び。

これには植物を世話させることも出來ます。耕したり又肥料を施すことは成人が行つて幼兒には種をまかせ、水を注ぎ、草をとる位のことを行はせるのです。幼兒の數の多いところでは花園を區分して幼兒の所有地を定めることも出來ます。

砂場を造つて遊ばせるやうにすることも必要である。砂場の上には別に屋根を造り或は影多き樹

す。これが感化教育上の一大要點です。幼少の間に花を愛し樹を護ると云ふ美はしい習慣を造り、また鳥や獸を愛してまるで我が友の如く取扱ふ中に、自ら美はしい同情の念を生ずるは幼兒の精神生活に大きな價值がある。天然を愛するのは高尚な精神生活の發達する始めであります。

幼少の時に此美はしい天然を愛する心を養つて置けば、後に迫んで動物を虐待するやうなことは避けられると思ひます。西洋の人々はよく動物を

愛します。例へば犬や馬などを愛する程度は大したものです。これも矢張幼少の間から常に犬や、馬を友の如く愛して居つたためだらうと思ひます。自然を尊び天然を愛する心を幼兒の胸に深くつぎ込んで置けば、これが智情意の方面に種々の形に於てよき實を結んで實際生活に利益を與へるのです。この邊の消息は幼兒哺育に従へる人の領解を要するところだと思ふのであります。

幼稚園に於ける數の取扱につきて

神戸幼稚園長 望 月 くに

一 數の名稱と數の觀念

(1) 數の名稱とは、數の系列即一二三四五六と數の順序通りに讀み行くことにして、大人ならば同

時に數觀念の伴ふものなれども、幼兒に於ては無論數觀念の構成せられたるにも、理解せられたるにも非らずして、唯一定の順序に配列せられたる數の名稱即言語を學習したるに過ぎずして、數の

觀念とは全く異りたるものなり。

(2) 數の觀念、幼兒の數の觀念は一つ又一つ更に又一つと個物を數ふる動作が、主要なる内容となつて、始めて數の觀念成立す、而して、其之を數ふる動作は幼兒があらゆる遊戯、遊具、食物の分配占領、家庭幼稚園に於ける器具等によりて、不知不測の間に爲さるゝものなれば、其數觀念は著しく發達すべき筈なるに、不定の「多」の觀念は、最も幼き時より成立するに拘らず、一定の數觀念は比較的後れて發達す。こは全く、數觀念は物體の直觀より分離して、抽象的の性質を帶ぶるが故に、此觀念の成立は幼兒に於ては甚だ困難なる事たるべし。

今神戸楠兩幼稚園の幼兒三百三十人に付きて、其記憶せる數系列の名稱及數の觀念を調査したるに、左の如き結果を得たり。

二 數の名稱の調査

(1) 其方法 幼兒を一人づつ呼び來り、一つ二つ三つ四つと順次に數の系列を讀ましめ誤れるか、又は、讀み得ざるに至りて止め其數を記す。

(2) 結果 此の調査の示す處によれば、四年——五年の幼兒は、男女共二十以上を誦し得るもの至つて少なく、五年——六年の男兒は二十九迄を、女兒は三十九迄算する者最も多し。大體に於て二十九、三十九等次の階段に移る時に於て、其誦む方に困難を感ずるもの、如く、女兒は手毬歌を誦するにより數の名稱を知るは男兒に勝れるが如し。稀に一萬を數ふるものあり。僅に三四より其名稱を知らざる者あり。個人差の此の如く大なるは主として、家庭及幼稚園に於ける無意、有意、教育の如何に影響するなるべし。

三 數の觀念の調査

(1) 其方法、四年——五年の新しく入園せる幼兒を、二名づつ保母の兩方に居らしめ、膝の上に貝、

椿の實、まめ等を置き「貝を一つ下さい」椿の實を二つ下さい」といひながら兩方の手に幼児の差し出すを見るに、自分の數へ得る數に至れば、それは「多」と考ふるにや、一つ二つは明に數へ、三つ下さいと云ふに及び、或者は一握して多數を出し、他の者は四つ迄數へ五に及びて同じく一握りの多數を差し出せり。他は皆之に準ず。

五年——六年の幼児は二十人程づつに分ち、前記の如き各種の數多き果實、種子、貝類を箱の中に入れて渡し置き「何々を五つ下さい」。「何々を下下さい」と求むるに應じて持參せしめ一一之を檢せり。然して殊に百以上を算し得る者には多數を與へおき、其計算方法を見しに十個づつに區分して、十個が十で百なり、百が十で千なりと自から工夫運用を爲し居たり。

(2)結果 此の調査の示す處によれば、四年より五年の男女兒共三四迄の觀念を有するもの最多し此幼兒は本月始めて入園したる者なれば其の數觀

念の影響は全く家庭に於ける無意的の教育より自然に得たるものなり。

五年——六年の幼兒は男兒に於ては十四迄を知れるもの最多し。女兒にありては遙に男兒に劣り三迄を知る者最も多く夫より漸次下降して十三迄は猶知るもの多し。此幼兒中一年間幼稚園教育を受けたるものは、其三分の二にして家庭より直ちに來園せるは其三分の一なり。而して其成績を檢するに、幼稚園教育を受けたるは、家庭教育のみの幼兒よりは概して成績良好に確實なる數の觀念を有するもの如し。

幼稚園に於ける數の教育方法といふも別に算へ方教授をなしたるにあらず。唯遊戯の際、何を何個持つて來て下さいとか、自然物採集等の場合に、自分の與へられた數札（十以下の數を丸にて示したるカード）の數だけ採集せしめたる等の影響を受けしものにて、幼兒は必要上より、自發的に學びしものならん。

女兒に於ては、四年——五年の年齢に於ては教育上男兒と差異なきに拘らず、今此調査によりて見れば、一年間の相違にて遂に男兒に追ひ越されたるは、女兒は男兒よりも數の能力の劣れるによるか、または自發活動の及ばざるあるに基因するなるべし。

四 幼稚園に於る數の取扱法

モンテツツリーの教育中殊に算術教授に於て成
教せるは人の已に知る處なり。是より先きフレ
ベルは、人の教育第三十八節に

數の關係を知る事は兒童生活の上に大なる利益を與ふる者である。そこで母及他の保育者たる者は數の性質と人間思想の特別なる法則に従つて、極めて早くから幼兒の衷心に數學的能力を發達さす事が必要である。之は實に兒童精神の要求である」と説き

我國に於ても明治八年幼稚園の開設せられし頃

より數へ方を幼兒に課したる事ありき。されど今日に於ては何れの幼稚園にも數へ方といふ時間を特に設けらるるを聞かず。かゝる特別の時間を設くるの必要はあらざるべけれど、つらつら幼兒の遊戯を観察する時は、數の觀念及其計算は彼等の日常生活に必要な程度に於て十分に樂しく行はるゝを以て其丈にても已に、其目的を遂げらるべき次第なれども、之を保育者の方面より考ふる時は、何等かの方針を定むるを以て便利且有益なりと思惟す。

(一) 小學校の準備としては個人差の減少を計る事、前記諸表の示す如く幼兒の數の觀念には、個人差非常に多きを以て十分に發達せる者は暫く措き、其年齢の平均に到達せざる兒童あらば、適宜の指導を與へて普通の幼兒と並行し得るに至らしむることは、單に該幼兒の幸福のみならず、小學校に於ける取扱上にも亦便利なるべし。

(二) 數觀念の養成 幼稚園時代に於ける數觀念

の養成は全く直觀的具體的にてあらねばならぬことは明白なる道理なり。されば幼兒の遊戯、玩具遊、談話等苟くも數ふべき機會あるごとに興味あるべく之を取扱ひ一つ二つと數ふる動作によりて明かに數を識り得る程度より始め、遂には片手の指(五)兩手(十)位は計算を用ひずして認識し得るに至らしめんことを期し、而して其程度は右の表により、四年——五年は五、五年——六年は十以上少しく進みても可なるべし。

(三)數の運用 數の觀念の發達は勿論、其運用の伴ふべき等なれども、幼稚園に於ては、小學校に於て教ふるが如く、其運用を規則正しく教ふるに

幼 兒 觀 察 記

從來我幼稚園に於ては一定の題目を設け幼兒の

は及ばずして、單に幼兒自身の必要に應じ彼等の自から啓發するに至るを待つべきなり、モンテッソリーの如く幼稚園に於て十分に算術に力を盡す時は、必ず其成績の見るべきあるべしと雖現今我國の有様に於ては、小學校に於て特別の方法を採用せられざる以上、其範圍内に立ち入るとは却りて心すべき事なりと考ふ。「調査人員僅少にして一般の結論を出すには尙餘りに早きも余の集めたる材料より試に概括推論し我幼稚園に於ける數の取扱上の注意に資したるものなり」(編者曰く此の有益なる研究報告には精細なる四個の表を添えられたるが、印刷の都合上遺憾ながら割愛したり。之れがために此の論文の光彩と科學的價値とを損せること尠からず特に記して望月氏及び讀者諸君に其の多罪を謝す)

廣島女學校附屬幼稚園 野 田 千 代

遊は多く是に基因し居たりしが、近來此の方法を

廢して此時期即ち幼稚園期に於て特に發達せしむべき本能を本として諸種の遊戯をなさしむ即ち最も自由にして束縛なき遊戯の中に幼兒の身體精神共に適當なる進歩發達を促さんとす。

此目的に適せしめんため大遊戯室に接して六個の保育室ありて何れも一方に窓を有し太陽の光線を十分に入るべく各室には小さき椅子、机、低き棚ありて幼兒の遊に用ひらるべき積木、鋏、紙、毬等を納む、二個の小室は蓆を敷きて家庭の遊をなすに最も便利ならしむ。室の一隅には大恩物戸棚等ありて臺所道具は凡て茶戸棚に納めらる、押入には人形、衣類寢具を入れらる。幼兒は自由に此室に入りて各自の思ふがまゝに單獨に、或は組を成して遊び續くるなり。

彼等の遊は各其好嗜によりて異り庭に出で、プランコ、シーソー、綱飛をなすあれば遊戯室の一隅にて土臺に到りて餘念なく遊べるあり(移動本能)母を氣取りて、人形を背負ひ、子守歌唱ひつゝ、縫

物をなすもあれば、側にては襦袢にて洗濯に餘念なきもあり(養護本能)

竹片を持ちて萬軍を指揮せる勇將もあれば、園の畑には三四人の幼兒鋤を持ちて百姓の歌節面白く耕すもあり、「豆ガ出來タラ、竹ヲ立テマセウ」と私語す。

ボートの歌聲聞ゆると思へば、彼方の廊下にては二三人の男兒積木のボートを構成して愉快げに餘念なく歌ひ居たり(構成本能)

保母は常に幼兒の背後に立ち、靜沈なる態度にて各自の遊を注意して觀察し、此時に起りし事項中全兒に與へて有效なりと認むる場合には、同事項を遊戯的に組立て、經驗せしむ。

又教師は日々幼兒を觀察して彼等に必要なりと認むる課題を與ふ、かくして幼兒の表す幾種の遊戯を觀察研究して、其不足を補ひ以て心身共に圓熟せる幼兒を作らんとす。

今茲に自由遊戯の一節を述べんに

家庭遊び及び其發達

十月二十一日

一人の女兒は保母に來り「先生私ハ人形の守ヲシマス」と私語するや、傍にありし二三の女兒も共に家庭遊をなさんと云へり、一人の男兒藤田さん「僕ハオ父サンニナリマスヨ」と云ひつゝ積木にて家を建て多くの椅子を持來りて「僕ハコレデ廊下ヲ作リマスヨ」とて眞面目に働きたり、二三十分餘も餘念なく椅子と椅子とを相對せしめて、廊下を作る代りに椅子と椅子との間を離らしめ、其上に板を置きて前日のより幅廣き廊下を作る、ゆきチャンは廊下を二階と呼びて卓、茶碗、箸等を持來りて來客を饗應せり。

十月二十三日

今日も家庭の遊をなし、が、昨日の三人が増加して五人の兒童が共に遊び居たり、毎日お父さんを氣取れる藤田さんは積木を運ぶに一片宛運搬するに代ふるに、椅子を持來り其上に積木を載せて

運搬せり。

十月二十五日

母となりて遊び居たりしゆきチャンは、草履の穿きありし上を歩みたり、是を觀察し居たりし保母は「ゆきチャン御客サンハ、何處へ下駄ヲ穿キマセウカ」と云ふや、否や直に客の下駄を竝べ置きて室内に入れり。

十月二十八日

家庭の遊をなす時幼兒は常に積木もて、家の輪廓を作り居たりしが、今日田中さんは下駄箱を構成して、家族の下駄を納めたり、傍にありし保母は人形を持來りて人形の著衣を入れる、箆笥を作らんことを促したれば、直に構成し始む。片山さんは是を見て「ワタシ人形ノピアノヲ作リマスヨ」とて異なる幾種の積木を持來りて、人形のピアノを作りたり。

しげチャンは「先生人形サンニ、音樂ノ本ヲ下サイ」とて音樂の書を持來りて人形を座せしめ四

五人の女兒は其邊にありて歌ひ居たり。しげチャン曰く「先生今日ハ音楽會デスヨ」此間ゆきチャンは、臺所にありて、食事の用意を成し居たりしが「皆サン入ラツシヤイ、十二時ダカラ御飯ニシマセウ」と云ひしかど唱歌に熱中せる幼兒はなかなかに食卓に著かんともせざりしかば、保姆は直に客となりて訪れ「私ハネ、今日御招ヲ受ケテ客ニ參リマシタノ、今丁度十二時デスカラ何卒御一緒ニ頂キマセウ」と云ふや一同食卓に著きたり。

十一月六日

三人の女兒と一人の男兒家庭の遊を成し、母なるゆきチャンは、人形を眠らすに小守歌を唱ひつゝありしが、折しも、組の中にて最も活動に満てる稔さんは、大聲にて歌を唱ひつゝ歸り來り家中を走り廻りしを見たるゆきチャンは「赤チャンヲ眠ラセテルノデスカラ、靜ニナサイヨ」

十一月八日

今日も家庭の遊を成し居たりしが食事の際「オ

母サン私ニ御飯ヲ入レテ頂戴」と五人の兒童は母に迫り居たり、此處に到り保姆は客となりて順序に茶碗を渡し、他人の終るまで待つ事の必要なる事を示せり。

家庭の遊をなす時草井さんは、家の門に、旗の必要を感じ、是を立てんとしたれども、立つる事能はず、恩物を立て、其間に旗竹を立てしかども、直に倒れたり。次に小石を持來りて、試みたれども效を見ず、遂に諸處を隈なく探せし結果、押入の中にて絲卷を發見し、此孔に竹を立てしに全く堅固に立ちたれば、此時の喜顔面に表れ「先生入ラツシヤイ、コレ旗ガ立チマシタヨ」と實に幼兒は大人より教へられしよりも、自から方法を發見せし時は、其満足幾倍なるかを知らず。

十一月二十三日

今日もゆきチャンと他の三兒とは、家庭の遊をなす、始めにゆきチャンは、第六恩物にて臺所の水道流棚、等作り居たりしが、ふと、盥を持來り

て、人形の著衣を入れて、洗濯をなす、成し終りて是を乾かさんとなし居たれども、柱無きを見て「先生如何シマセウカ、竿ガナイカラ乾ス事ガ出来マセン」と側に立てる村田さんは「ゆきチャン私が作ツテ上ゲマセウ」と云ひつゝ、大恩物數個を持來りて柱もて物干を作りたり、是を見てゆきチャンは、大喜にて直に竹片を置いて、著物を干したり。

十一月二十九日

ゆきチャンと、茂チャンとは、家庭の遊を成す時常に母となりて、他の幼兒は、子供として取扱はれ、右兩人は、組の女兒の内、最も勢力家也。今日兩人共休園す、立石さんは、兩人の休を喜び「先生今日私はオ母様ニナリマスヨ」とさも嬉しげに家庭室に入りて、臺所道具、人形等出して大満足の有様見ゆ、歸る際「先生明日モ、オ二人休ミナラ、ウレシイデスヨ」

明日同二人來らば注意して母を擇ばんと氣付く
十一月三十日

果して二女兒來る、母にならんことを争ひ居たりし故「今日ハ立石サンガ、ホントノオ母様ノ様ニ御手傳ガ出来マシタカラ、立石サンニ、オ母様ニナツテ頂キマセウ」と云ふや、二女兒あまりに争はんともせずして「ソレナラワタシ、オ姉様」「私は親類の叔母様デスヨ」とて親しげに遊び居たり。

十二月八日

今朝は家庭室に入りて遊ぶ子供一人もなし、田中さんは色鉛筆にて熱心に幼兒の繪を畫き居たりしが、其を眺めありし草井さんと茂ちやんは直に紙を持來りて眞似し始む。

藤田さんはクリスマスの木の室内に運ばれしを見るや「先生、アレハ杉ノ木デスネ」と實は樅の木なりしなり、故に保母は樅と杉との枝を持來りて二者の區別を示したり。

十二月九日

今朝片山さんは、宅より松の木を持參して、家庭室の中央に立てたり、「ソレハ何ニシマスカ」との

保母の尋に對し、「先生人形ノ家ニモクリスマスノ木ガ入りマスカラ、コレハネ、クリスマスノ木ニシマスノヨ」今日より家庭室の飲事遊は變じて、クリマスの遊となる、家庭室に於ては、机を圍みて、三四人の兒童熱心に切紙提灯等を作りて家庭室内のクリスマス木の裝飾に餘念なかりき。

一月十二日

茂チャンは、家庭の遊を成す際、棚の上の箸を取らんとして床上に落ちし土瓶の蓋に氣付かすして、其上を踏みたり、傍にて其を見し草井さん「アラ茂チャン土瓶ノ蓋ヲ踏デ入ラツシャル」と云ふや、茂チャンは、直に蓋を取上て、棚上に置きたり。

一月十三日

今朝大雪にて、庭一面白砂の雪、迎も、外に出で、遊ぶ事能はず、遊戯室にはストーブの外五個の火鉢を備へて、室内を暖めたり、活動的なる五人の男兒は外に出で、雪を集め、集めてはストーブの上に置いて溶解する様を見て楽しむ。

家庭室の火鉢の邊に座せる女兒は、金盃に雪を入れしものを火に温めて熟視し居たりしが、背後に立てる保母を顧み「先生ワタシ雪ノ圓イノヲ此内ニ入レマシタラ、今雪ガ寢轉ビマシタ」とストーブの傍にて雪を温め居たりし男兒等、雪の熱湯に變化せる有様を見て不思議と思ひしにや、稔さは「先生此湯ヲ外ニ出シタラ、又氷ニナリマスカ」と尋ねたり。

彼の望むまゝに熱湯を外に置かして翌朝其變化を示さんとす。

保母は沸騰せる湯を戸の硝子上に残し置きしに一時間も立たざる内に、白き氷様の點々は、硝子上に残されたり、幼兒は是を見て大満足に見えたり。

一月二十一日

毎日家庭の遊をなせる女兒は今朝保育室内にあり、机、椅子を遊戯室の一隅に持來りて七人の女兒は幼稚園の遊を成す、茂チャンは教師となりて他

の幼児を周圍に並べて、幼年の友の繪を示しつゝ、話をなし居たりしが、折しも草井さんは是等の幼兒を見付け嬉しげに走りゆき、残れる椅子に座せんとせしに教師となりし茂チャンは是を見て「私ノ椅子ヲ取ツテハイヤヨ、アナタ彼方ニ入ラツシヤイ」とて草井さんを退けんとせり、直に保姆は此を見て泣ける草井さんを伴ひゆき「先生此方ハ私ノ友人デスノ、ソシテ先生ノオ話ヲ大層聞キタガツテ入ラツシヤイマスカラ何卒キカセテ上げテ下サイ」と語るや、茂チャンは急か椅子を持來りて、草井さんに進めたり、幼兒の誤れる時かくせよと命するよりも、遊の中に自然に其事を成さしむる様、遊戯的に命令の實行を成さしむる方、遙かに有效なり。

建築の遊及び其發達

一月十一日

藤田さんは毎日積木にて家を構成する事を喜ぶ藤田さんと他の一男兒は保育室の机を運び其木に

積木もて二階建の家を立て、家と梯子段も出來窓も兩側にありて如何にも可愛らしき家なりき、出來上りし時藤田さんは「先生、ワタシノ家ヲ見ニ來テ下サイ、二階建ガ出來タノデスヨ」出來上りし家は天井低き爲め天井にて頭を打つ、保姆は人形を持來りて「コレ人形ノ頭ガ、天井に、アタリマスヨ」と暗示するや、他の積木をもて是を高ふして、二十分餘も經ずして出來上りし家は人形を入るゝに十分高く出來上りたり、歸る際は此家を翌日迄残す事を願ひたり。

一月十九日

今朝幼稚園の保育室にある彼の家を眺めて「先生、今日僕ハ、臺所ヲ造ルカラ、板間ニスル木ヲ出シテ置イテ下サイ」といふ。

自由の遊の際、彼は長短の板にて棚、水道、臺所等を造りて、其上に臺所道具を置きたり、臺所の建物終るや積木にて門を造らんとせしかど、積木なきを見て「僕、如何セウカ、門ヲ造リタイケレド

モ、木ガナイカラ困ル」と訴ふ、保母は室内にて木の代用になるものなきやと尋ぬれば、室内を限なく探し、遂に砂場より板を運び來り、先に屋根を積木にて、作りありし場處に板を置きて、積木と取換へ、其にて門を建て、大満足の様見ゆ。

家庭室砂場等にて遊び居たりし幼兒等皆集り來りて「アラ、キレイナオ家ネト同音ニ叫ブ」

建築の終りたる時、保母は「皆出來マシタネ、何モ入りマセンデセウカ」と問ふや、藤田さんは二階の梯子段のなき事に氣付く、然れども積木は一個も残り居らず、側に立てる永村さん曰く「ドウセ人形ノ家ダモノ梯子段ハナクトモ、イ、デセウ」といふに「イエ、僕ハ梯子段ガ入ルノダ」とて押入を探して、梯子を持來りて二階の段梯子の代用とし、人形を上げ下げをなさしめて「モウ、出來タ」と大喜悅なりき。

盜賊の遊の例

一月二十三日

五人の最も活動的なる男兒は、何物にも興味を持たざるもの、如く、初めに辻臺にて遊び居たりしが、僅か數分間にて砂臺にゆき、此處も二分間程にて遂に庭に出でて『皆デ賊ノ遊ヲシマセウ』といふや稔さんは「僕ガ賊ニナルカラ君等四人ハ巡查サンヨ」とて逃げ廻る後を四人の巡查は追ひ掛けたり。

思ふに是等の男兒は何か活動的な遊を望みて、遂に活力がかく賊の遊に向ひしもの如し「マア賊ヲ追フテルノデスカ」「巡查サンハ賊ナドスル人ガアツテ氣ノ毒デスネ」「巡查サンハ賊ヲ追フ外、如何ンナ事ヲナサイマスカ」と問ふや景ちやんは「アノネ、先生、巡查サンハ火事ノ時ニ、ヨイ手傳ヲシテバスネ」と云ふ「ソソナラ火事ノ遊ヲシマセウカ」といひて五人の男兒を砂場に導き、一男兒は積木にて梯子を作り他の者は家を建てたり。

警鐘を亂打するや消防夫は積木の家を破潰し、帶のホースもて水注ぐ、かくする事三十分餘も續

きたり。

二月二日

今朝も此等五人の男兒は、椅子にて棧橋を造り、
二臺を軍艦として用ふ、景チャン板間を泳ぎ居たりし故、保姆は「コレハ軍艦デスカ、軍艦ノ外、
ドンナ船ガアリマスカ」と尋ねれば直に彼は椅子を對向に置きて、船と呼ぶ、他の兒童も同様になす。二本の木を取りて撓と呼ぶ、景チャンは是を置きて外にいでたり、一人の男兒は椅子の船を見て小さい船といふや、永村さん曰く「コレハ船ガ海ノ向ノ方ニアルカラ小サク見ユルノデス」暫くにして景チャンは歸り來り、椅子を相對せしめ置き、其上に臺板を置きて電車と呼び、他の男兒が船にて遊ぶ處にゆきて、邪魔を成し、故「景チャン、是は電車デスカ、電車ハ船ノアル處ニアルノデセウカ」ト問へば、直に電車を彼方に運びたり。

汽車の遊

二月四日

自由の遊の時、五人の男兒は何事をか、相談し居たりしが、元氣なる稔さんは、引出より綱を持ち來り「皆デ、汽車ノ遊ヲシマセウ」と云ふや「僕ハステーションヲ作ル」と立處に答へて、景チャンは積木を車に載せて持來り、机上に積木にてステーションの開札口を作る、建築中彼は窓を作るに當り、上に置く木の短きを見て、板片の長きものを見出し、是を上置き遂に窓を作り、切符を切り判を捺して熱心に遊ぶ、切符賣として窓の後に座すや、多くの兒童は切符を求むべく窓を覗く、此窓より切符を渡さるゝ事を如何にも樂しげに見たり。

稔さんは汽罐車の後に乗る、永村さんは旗持となりて各分業的に遊ぶ、藤田さんは竹を負ひて「名物廣島柿」と呼ぶ。

彼等の盛なる遊を見たる兒童は、各兒の遊を置きて、汽車遊に集り、彼も我もと乗車せんとす、集まりし者は廿五人なりき。

此混雜を見たる、村田さんは「先生僕ハ待合室ヲ作リマセウ、アマリ、澤山ノ人デ停車場ガセマイデスカラ」と云ひつゝ、椅子を周圍に置きて、停車場と呼び、火鉢をも据へたり、五六名の兒童は直に來りて休憩す。

汽車の停車場に著するや、車中の兒童先を爭ふて亂出す、故に教師は切符切に著意すべく暗示したるに、彼は大聲にて制したり。

二月十六日

同五人の男兒、今朝は砂場にゆきて、汽車の遊をなす、村田さんはステーションの門を造り、景チヤンは竹片にてレールを地上に畫きて其上を進行す、二の組の二三の男兒是を見て、直に出で來り神戸新橋と停車場を庭の彼方此方に畫く、切符を作り居たりし稔さん風の強きため紙切の飛び去るを見て「先生、此紙ヲ持ツテ居テ下サイ、風ガ飛バセルカラ」と保姆は「何かデ飛バナイ様出來マセンカ」と聞けば暫くして稔さんは積木の一片

を持來りて紙上に置きたり。

永村さんは竹片に赤緑の紙を張りて旗を作りて記號旗の必要を説く、汽車の來りし時に其二種の旗を用ゐたり。

二月十七日

今朝も同じ兒童汽車の遊をなす、永村さんは夜の出立停止の記號として燈の入用を説き、竹をまげて圓くなし、赤と緑の紙をはりて記號燈を作る、綱の先に毛絲の附著せるを見て、景チヤンは「先生此汽車ハ人ヲシキマシタヨ」と。

店の遊

一月二十三日

汽車の遊に餘念なかりし男兒等は今朝は外にもいせず、室内を彼方此方と歩み居たり、保育室の三四の女兒は紙上に色鉛筆もて模様を畫きて彼等は呉服屋の働人なりといふ、側にありし五人の男兒は直に店を作らんことを話し、恩物にて店臺を造る、二人の男兒は店作りにも忙にて三人は切紙

をもて帽子、前掛等を切り居たり、店臺を終りし

時藤田さんは引出しを作らんとせしかど、何物をも代用すべきものなきを見て「先生引出シガ入ルケレドモ、如何シマセウカ」と、保姆は戸棚の引出を用ふべく示せば大喜びにて是を用ひたるに、適當なる店臺出來たれば、其引出に紙、筆、鋏等入れて客待顔に座し居たり。

二、三の組の幼兒は店の遊の興味あるを見て

帶、羽織を求むべく来る。

藤田さんと景ちやんは番頭となりて客を歓迎す藤田さんは反物の丈を計らんとして、尺なきを見て指を尺の代用として計りたり、隣室にて積木にて遊び居たりし女兒は店に入り來り「私等ハネ、此内ノ伯母サンヤ姉様ニナツテ著物ヲ縫ツタリ、御飯ヲ煮タリシマシヨウ」と云ひて、室内の掃除飯事等して遊び愈々盛に進行せり。

『菊ちやんの舞踊會』(二)

英文學に現はれたる子供(三十三)

岡田みつ

スミス夫人が、食卓の主人役を勤めるしたり顔や、少々の失策があつても平氣で居る様子は誠に可愛らしかつた。大事のバイを切り分ける拍子にナイフが鈍なまけなので床ふかへバイが跳ね飛んだり、御客が情なさけない程早くパンとバタを頬張つてしまつたり

態々用意したブリキの匙で食べてもらう筈のカスタードが、ズル／＼飲まねばならぬ様に柔かであつたりした。

スミス嬢は、侍女のベッスちやんと御菓子ごかしの奪ひ合をした爲ベッスちやんは御皿ごと御菓子ごかしを四

方へぶちまけて、ワツと泣き出して仕舞つた。やうやう食卓に付かせて御砂糖壺をあてがつて和め賺してゐる内に、小饅頭の入つて居た大皿が紛失して、影も見えなくなつた。このバチは、今日の御馳走の重なもので、スミス夫人が自身手を下して作つたわけ故、夫人が怒るまい事が非常の立腹で、

「あなたが隠したのよ、トムさん。私知つてゐるワ」

とミルク入れをふり翳して、怪いと見た御客に通つた。

「僕ぢやありません」

「あなたよ」

スミス嬢は、騒ぎの中で、大急ぎにジュエリーを食べ盡しながら、

「口答へするのは失禮ですよ」と言つた。

「返してやりたまへデミ君」とトムがいふと、デミは濡衣を著せられて、立腹し、

「偽言つくない！ 君は、チャント自分のかくし

に入れて居る癖に。」

「出させてしまふではないか。菊ちやんを泣かせちや悪いや。」とナットが言ひ出した。

菊ちやんは泣いて居た。ベッスも御主人思ひの女中と見えて、奥さんと共に泣いて居ると、スミス嬢は、男の子はほんとに厄介物だと罵つて止まなかつた。その間に男兒同士で喧嘩が始まつた。

デミとナットと二人の義士が、敵に打掛かつて行くくと、トムはテーブルを小楯に、盗んだ小饅頭をドン／＼叩き付ける。丁度小饅頭の弾丸のやうに堅く出来てゐたので、投げ付けるには極都合がよかつた。此彈藥彈丸の續くうちは、敵も優勢であつたが、最後の饅頭が手を離れるや否や、トムは捕へられて、室から曳摺り出され、見苦しくも廊下に投げ捨てられた。味方は勝鬨を擧げて元の坐に戻り、デミが妹を慰めると、ナットとナン（スミス嬢）とは飛び散つてゐる小饅頭を拾ひ集め、干葡萄をもとの孔へはめ込み、凡てを御菓子皿の上へ

奇麗に並べたので、たいして體裁悪くもなかつた。併し、上の砂糖がなくなつて美しさが消えてしまつたので、今更誰も其に手を出す者は無かつた。伯母さんの聲が階子段の邊で聞えたのでデミが急に、

「もう御暇にしようではないか」と言ひ出した。

「そうだね」とナットも、折角拾ひ上げた風來の菓子をあわて、下へ置いた。伯母様は二人が引上げぬうちに室へ入つて來た。すると、二人の小婦人は受けた無禮の數々を訴へた。伯母さんは、しきりに同情して聞き終つた末に。

「もう／＼こんな人達を招待なさるな。何かあなた達に親切な事でもして此罪亡しをしないうちには、招んで御やりなさるな」と云ひながら三人の犯罪者を白眼めた。

「笑談にやつたばかりです」とデミが言ふと、

「人を厭がらせるやうな笑談は良くありません。デミさんは、妹を虐める事なんぞは覚えまいと

思つたのに呆れてしまつた。こんな優さしい妹なのにな。」

「男の子ツていふものは妹を虐めるに極まつてゐるものだツてトムが言ひました」とデミは小聲で呟いた。

「うちの男兒にはそんな事をさせません。あなた達兄妹二人仲よく遊べなければ、菊ちやんを實家へ歸らせませすよ。」と伯母様は眞面目に言つた。この恐ろしい一言で、デミは妹の方へすり寄ると菊ちやんも急いで涙を引込みました。二人は別々に置かれるのを何よりの不幸と考へてゐた。ナンはあとの二人も叱られなければ不公平だと思ふので「ナットもいけないんですよ。そして一番わるいのはトムなんです。」と評した。

「僕悪う御座いました。」とナットは面を赤らめて詫びた。

「僕はあやまりせん。」と廊下で耳を欬て、聽いてゐたトムが鍵の孔から怒鳴つた。

伯母さんは、失笑しさうになつたのを、我慢して、眞面目に、戸口を指して

「さ歸つてよろしい。が、三人とも伯母さんが許すまで、此少女達と物を言ふ事も遊ぶ事もしてはいけません。よく覺えていらつしやい。そんな愉快をうける價值がない人達なのだから、私が禁じます。」

と言つた。

デミとナットは急いで室を出ると、廊下で恥知らずのトムが、悪口を言つて二人を馬鹿にして、もう一所には遊ばぬと言放つたが、その誓も僅十五分間位しか續かなかつた。菊ちゃん、舞踏會の不成功だつた事は諦めたが、兄さんから離された辛さを感じて、兄様があんな所行をなさらなければよかつたのにと歎いた。ナンはむしろこの出来事を悦ぶらしく、三人に對つては、ツンと澄して相手にせぬ風をした。

男兒達は直に閉口して、仲直りがしたくなつた。

菊ちゃんは遊んだり御馳走を作つてくれないし、ナンは滑稽な眞似をして笑はせてくれないし、おまけに伯母様迄が無禮を受けた婦人の一人と思ふらしく三人には、物も言はず、遇つても見ぬ振りで通り過ぎて仕舞ひ、物を頼みにいつても忙しいからと言つては何もして下さらなかつた。伯母様の慈愛からかく遠ざけられて、三人は、日中に太陽が没した程に暗い淋しい心持ちになつた。

此變つた有様が全三日續いた。三人は、もう辛抱がしきれなくなつて、此日蝕が無限に續いては大變だと、伯父様の處へ相談やら懇願やらに出掛けていつた。伯父様は、内々指圖をうけて居られたものか、斯く／＼したらよかろうと造作もなく智恵を授けて下さつた。ところが、三人とも少しも怪しまず、その忠告を有難く受けて、その通りに實行した。

先、三人ながら屋根裏の室へ密かに退いて、遊び時間を利用しては、或る不思議な物を製造し始

めた。糊の要る事が非常に終にエシヤが小言をいふ位なので少女達は何だらうと首を拈つて居た。

ナンは室内の模様を覗きにいつて、も少しで鼻を戸に挟まれさうになつた。菊ちやんは、一同が一所に遊べないで、秘密な事をしたりするのは情ないと言つて歎いてゐた。ある水曜日の晴れた午後ナットとトムは、天氣模様や風の工合を見定めてから、新聞紙に包んだ大きな平つたい物を持つて出て行つた。ナンは知りたくて〜死にさうだと騒ぎ、菊ちやんも焦れて泣きさうになつて居ると、デミが伯母様の室へ、帽子を手にして入つて来て、世にも叮嚀な調子で、

「あの伯母さま、小さい女兒達ひとと一所に、僕達の催す「ピッキリ」會へ御出かけ下さいませんか是非いらつしやい。それは上等のですから。」と述べた。

「ありがたう。喜んで出ませう。貞坊も連れて行かなくてはなりませんか……」と伯母様はニコ

ニコして答へた。デミは、雨のあとの日光程にその笑顔をうれしく感じた。

「是非連れていらつしやい。小馬車が小さい女兒達にと支度がしてあるんですが、伯母様は歩くのを御構ひないでせうね。」

「歩くのは大好きです。ですが眞實に私がいつても邪魔にならないの。」

「え、大丈夫！ どうか來て下さい。伯母さんが來て下さらないと、會がつまらなくなりませう。」

とデミは熱心を顔に現はして述べた。

「ありがたう。」と伯母様はデミに恭しく敬禮をして、さて少女達に向つて、

「さ、皆様を待たせてはいけないから、帽を被つてすぐ出掛けませう。「ピッキリ」するものつて何でせうね」と云つた。

伯母さんの言葉に連れて、皆支度を急いだので五分とかゝらぬ内に、三人の少女と貞ちやんとは小馬車に乗つた。デミが先頭で、伯母様が殿しんがり御

供に犬のキットが随従した。小馬車を曳く、「トビ
ー」といふ馬は頭に紅い羽の塵拂ほたきを著け、二流の
旗が馬車の上に翻へり、キットは首に藍色のリボ
ンを飾り、デミは衣服の襟に蒲公英たんぽぽの花束を挿し
伯母様は、儀容を増すために日本製の日傘を翳
した。

少女達は、途中、心がわく／＼して一向落付い
て居られなかつた。貞ちゃんも、たゞ／＼面白く
て馬車の外へ帽子を落してばかり居るので、伯母
さんが帽子を取上げてしまつたらば、今度は自分
が轉ろげ落ちる支度をやり出して皆を笑はせた。
催しのあるといふ岡へ到著いて、見渡すと、何
もなくて、唯草が風に靡いてゐるのみなので、子
供達は失望した顔をした。併し、デミは莊重な調
子で、

「さ、皆さん降りて、靜に立つていらしつて下さ
い、ビックリ會が始まりますから」と言ひ置い
て、岩陰へ入つてしまつた。その岩の上からは先

刻から、二つ三つ頭が出たり引込んだりしてゐた。
氣いきを凝らして待つ間程なく、ナット、とデミとト
ムとが各自一枚の紙鳶ひやくを持つて現はれ出て、三人
の少女に一つ／＼進呈した。ワツと喜びの聲が上
がるのを、男子達は制して、可笑しさを堪へた顔
付で、

「今のはビックリ物ではないンです。」と言ひなが
ら再び岩の後へ走せ返つて、こんどは鬪抜けて大
きな紙鳶に黄色で「伯母様へ」と書いてあるのを
運び出した。

「伯母様まで僕等に腹を立て、小さい人達の肩
を持つたから、やつぱり紙鳶も御好きだらうと
思つたんです。」と三人が一所に笑ひ／＼述べた
之ばかりは、伯母様にもビックリ物であつたの
で、伯母様は拍手して一同と一所に笑つた。

「これはまあ出来だ。誰が考へ付いたの。」と大
紙鳶を受取りながら尋ねた。

「伯父様が言ひ出したのです。伯母様も紙

鳶は好きらしいと仰つたから、思ひ切り大きい
のを作つたんです。」と「デミは謀の當つたのを悦
ぶ氣に見えた。

「伯父様は私の氣をよく知つていらつしやる。眞
に之は立派な紙鳶だ事！ この間、あなた方が
紙鳶上げをしてゐた時に、皆で羨ましがつたの
ね、菊ちやん達」

「それで僕達が之を作らへて上げたんです」とト
ムは逆立ちを始めた。之が満足を示す一番好い方
法とトムは思つたらしい。

「この紙鳶を上げませうよ」と元氣者のナンが言
ふ。

「上げ方が分らないワ」と菊ちやんが言ふ。

「教へて上げる〜」と男兒達が一齊に叫んで、
デミは菊ちやんのを、トムはナンのを、ナットは
賺しく〜ベスちやんのを取つた。

「伯母さん、一寸待つてゐて頂戴。伯母様のも揚
げて上げますから」とデミが言つた。伯母様を

閑却にして置いて、また御機嫌を害ねてはと氣
遣つて。

「ありがたうよ。伯母様は一人で出來ますとも。

それに助け手が來たから。」と伯母様が答へた。

成程、岩の彼方から伯父様が可笑しさうな顔を
して覗いて居た。

伯父様は出て來て、大紙鳶をスッーと揚げると
伯母様が上手に走り出す、その景色を子供達は面
白がつて見物した。ちぎに、ありたけの紙鳶が皆
揚がつて、鳥のやうに空中に浮んだ。誰も彼も驅け
たり、大聲を揚げたり糸を出したり、たぐり寄せ
たり、紙鳶が中空に狂ふのを眺めたり、脱げやう
と糸をグン〜曳くの負けじと抵抗したりした
ナンは夢中になつて騒ぎ、菊ちやんは紙鳶揚も御
人形程に興があると思ひ、小さいベスちやんは、
紙鳶を手離すのを惜んで、大概は膝に載せて、ト
ムが描いた不思議な畫を眺めて居た。伯母様は大
得意であつた。紙鳶も持主の氣性を知つて居ると

見え、思ひもかけぬ時にクル／＼廻つたり木に搦まつたり、河の中へ落ちさうになつたりして、終には、高く／＼揚がつて雲の中の一黒點となつた。

一同疲れたので糸を樹や垣に括り付けて、草の上に坐つた。伯父様は貞ちやんを肩にのせて牛を見に行つた。

「こんな面白い事をなすつた事ありますの」とナットが伯母さんに訊いた。

「何年も前に、まだ子供の時分にね一度紙鳶を揚げた事があるそれつきり。」

「伯母様が子供の時を知りたかつたな。必然面白かつたにちがひない。」とナットが言つた。

「悪戯ッ子だつたの」

「僕は悪戯ッ子好きだ」とトムは態とナンを見たので、ナンは返禮に白眼め返した。

「どうして僕は其頃の伯母様を覚えてゐないんでせう僕小さすぎたのでせうか」とデミが訊いた。

「さうでせうよ」

「僕の記憶力がまだなかつたんだな。御祖父様が心の働きは次第々に發達するものだつて仰つたから、伯母様の小さい時分には僕の記憶力はまだ發達しなかつたんだ、それで伯母様の様子を覚えてゐないんだ。」

「ソクラテスさんや、そんな事は御祖父様に御尋ねなさい。私にや返事は出来ない」と伯母様は手早くデミの癖を押へる。

伯母様がそろ／＼大紙鳶を下げ始めたので、
「もう歸るんですか」と皆尋ねた。

「伯母様は歸らなくては。さもないと、あなた方御夕食をもらへなくなる。そんなビツクリ會は嫌ひでせう。」

「今日のビツクリ會はうまく行きましたね」とトムが澄していふと、

「ほんとにね。」と一同が和した。

「何故うまく行つたか分りますか。御客が御行儀が良くて、事をよく運ばせたからでせう。伯母

様の意味が分つて。」

「え」と男兒達は答へて、互に極り悪氣に目を見合せて、紙鳶を肩にして、家路を指して歩き出した。(終)

摘 録

○フレーベル氏の九原則を

評す

(高島平三郎氏述)

(左の一篇は大阪兒童學會に於て高島氏の講述せられたるもの、載せて『兒童研究』にあり。

フレーベル氏は皆様の御承知の如くに今から百三十三年前獨逸のチューリンギアなるオーベルワイスバッハといふ村で生れ六十三年前七十歳で亡くなつた人で幼稚園の創立者であります。子供の教育に最も大切なる心理學でも教育學でも乃至は兒童心理學などいふ新しい學問は何れもフレーベル氏の亡くなつた後に發達したのであります故氏

の教育説には今日から見れば贊成の出來ぬ間違つた事も少からずあります。併し又氏が全く自己の宗教上の信仰及び哲學上の主義から考へた事で今日の學問に照して符節を合せたやうで眞に敬服することも多くあります。私は今北米合衆國なるマッサチューセツ洲、クラーク大學總長ジ、スタンリー、ホール氏の擧げられたフレーベル氏の九原則に就いて簡單な批評を試み幼稚園に關係のある方々並びに父母の方がお子さんを御教育なさる上の御參考に供したいと思ひます。

(一) 兒童ハ人類種族ノ發達史ヲ反復ス

これは極めて大切の考でありまして兒童に關する近世の學術はこの原理に由つて大に明らめられたのでありますフレーベルは全く自ら兒童の状態を観察して想像上からこの事を主張したのでせうが前世紀の後半分に於て生物學が著しい進歩を致しまして、その實驗的及び實驗的の結論に據りますと全く此の正確である事が證明せられるのであ

ります。この事は今なほ八十二歳の高齡を以て獨逸のイェナに退隱して折々著書や論文に由て世界の學界に消息を通じて居りますエルンスト、ヘッケル氏に由て創めて唱へられました。これ則ち系統發生と個體發生との並行、いひ換へれば一個人の發育は全生物發育の階級を短縮して繰り反へすものであるといふことになるのであります。

兒童學では此原理を採用して約説原理又は反復原理 *Theory of Recapitulation* と申すのであります。そこでこの原理に随ひますとすべての子供は大體三段の發育を致します。その一番始めは下等動物と同じやうに僅に反射運動本能運動簡單なる苦樂の情、感覺等が存するに過ぎぬのであります。が、その次の階級になりますと一層高等なる動物の階級にすゝみ前の諸作用以前に或は知覺或は記憶等の諸作用愛憎等の情緒なども生じて參ります併しまだ動物の階級を超えることは出來ぬのであります。がその前後の階級に達しまして始めて人類

となるのであります。腦髓が發育して人類の階級に入りましても野蠻人半開人文明人と次第に進んで參るのであります。それゆゑ子供は全く動物のやうな時期があり野蠻人のやうな時期もあり又半開人のやうな時期もあるのです。青年に達して始めて自分の住んで居る文化を味ひ得る人となるのであります。されば親や先生は兒童に對したら先づこの事を頭に入れ置き幼稚園の頃などはまだまだ未開半開の人類の階級をくりかへすものであるといふことを考へて適當の取り扱いをせねばなりません。フレーベルが百年も前にかかる事に氣の注いたのは眞に敬服すべきことであります。

(二) 感情及本能ハ智力及ビ意志ノ萌芽ナリ

この原則も亦前の原則に由つてその正當なることは明であります。感情や本能は動物の階級に於ても既に存して居るほど生存上必要のものであります。私ども人類の生活を調べて見ても知識の働く部分は甚だ少くその大部分は感情及び本能に由

つて活動して居るのであります。それ故子供の發育に於てもこれ等の働が基礎をなしてこれから感覺や知覺も生じ想像作用や推理作用も出て來るのです。又吾々の行爲もその初めは一々思慮して結果を考へてから現はれるのではありません。全く本能に導かれて知らず識らず動作するのです。それが基礎となり之に智力作用が加つて來れば初めて思慮的意志が生じて來るのであります。それ故子供の心の健全の發育を望む者は成るべく天真爛漫に子供の感情の發動するやうにしてやり又その本能も適當の時に自由に現はれるやうに誘導してやらねばなりません。之がやがて將來智識あり且つ意思の堅固なる人となる所以であります。

然るに幼い時より泣かせもすまい、怒らしもすまい、いたづらもさせまい、おとなしくさせやうと大人の考を以てあまり子供をいたはり過ぎると勞して效のないのみでなく却つて害を及ぼすやうになります。幼い時に遊び仲間が互に感情や本能

を表はし合つて相一致することもあり又相反對することもあるのでいろ／＼の經驗を得て智識も開けるのでありますから親や保母の方々は成る可く子供に餘計な干渉をせず出來る丈け自然に任せてそれぞれの心の作用の充分に發育するやうに努めねばなりません。一人子や老人育ちの子供が發育が後れたり身體が弱かつたりするのはつまり世話を焼き過ぎて子供の發育すべて感情や本能の表出を妨げるからであります。

(三) 自己活動自發活動及び遊戲ハ創造性ヲ有ス

子供は生れながらにして活動性を有して居ります。活動性といふのはちつとして居らずに手足を動かすとか全身を動かすとか或は視るとか聴くとか何か働をすることをいふのであります。子供は他から強ひられず又他から何等の刺戟も受けずには等の活動を盛んに始めます。自發活動は子供の身體の内部の働から自然に起る作用でそれは生れた時から認めることが出來ます。是等のいろ／＼

の活動が將來高尚なる心の働きの現はれる助をする
ことは非常なものであります。加之是等の働は人
に教へられず又人の真似せず全く自らなすことで
ありますから所謂創造性 Originalität を有して居
るのであります。子供の遊戯もその最初に現はれ
るものは全く自發活動であります。勿論遊戯の中
には模倣から來るものもありますけれども子供の
自由に任せて置けばそれ相當の創造性を發揮する
ものであります。

すべて人類に自己創造力のあることを認め之を
尊重してその力の發育生長に努めた所にフレーベ
ルの教育の精神が存するのであります。幼稚園の
眞の精神は全く子供の自發的創造作用を利用し遊
戯に由つてこの力の發育を助けやうとするのであ
ります。それゆゑ幼稚園と小學校とは教育の方法
が餘程かわつて居ります。全體正しく子供の本性
に従ひますならば小學校を幼稚園に近づけるやう
にせねばならぬのですがどうも一般に我國では幼

稚園を小學校に近づけやうとして折角のフレーベ
ルの主義に反したやうなことを行つて居ります。
大人の眼から見れば珍らしくも何とも無いいくら
も世間に有り觸れて居ることも幼い子供に取つ
ては全く自己の大發明新創造に屬することが多い
のであります。親たり保母たる人はこの事をよく
心得假令つまらぬ事でも子供自らの考自らの力で
作り出した事は充分にその價値を認めてその働き
を奨励してやるやうにせねばなりません。

子供に限らずすべて人の創造力といふものは他
から壓迫せられて現はれるものではありません。
自己の自由に思考し自己の自由に行動して始めて
充分に發揮し得るのであります。今日の教育で個
性を重んずるなどいふのもつまり兒童自己の働
く部分を大切に保護することで幼稚園に於て子供の
自發活動が遊戯を重んずると同じ譯であります。
第三の原則も亦百年も前にフレーベルの述べ
た事が今日に至つて益々光を放つ様になりました。

(四) 高尚ナル一元的基督教的萬有神教ハ眞正ノ教育哲學ナリ。

これは九原則中で最も異論のある條項でありませう。歐米の基督教國に於ては兎に角我國に於ては容易に之を受け容れることは出来ませぬ。而かもそれは常に信仰上の感情問題でなく極めて公平に考へて見ましても成立宗教の一つを一般教育の基礎と致しまする事には賛成しかねます。併しながら宗教心も他の多くの精神作用と同じやうに始めは極めて簡單なる萌芽から次第に發達してまゐるのであります故幼少の頃からその萌芽を害はぬやうにすることは甚だ大切のことであると思ひます。元來宗教心は畏れ Ehrfurcht が本になつて居ります。さうして服従とか感謝とかいふやうな感情が之に伴ひまして起つてまゐります。それゆゑ幼稚園の頃から物に觸れ事に臨んでかういふ心の現はれを助けるやうに導き又偶然の事であらういふ心が現はれたならば十分に之を獎勵し保護して

その發育を助けるやうにせねばなりません。幼い時から何も畏れる物がないといふやうに育てるのは決して褒めた事ではありません。又我儘一ぱいにさせて誰のいふことも聽かぬといふやうに育てるのも危険です。自由に活潑に育てる事は極めて大切でありますけれどもそれと共に父母長上にはチャンと服従するやうに躡ねばなりません。又人の世話になり恩を受けた時には十分有り難く思はせチャンとお禮の言葉をも述べさせるやうに躡ねばなりません。英吉利では一寸した事にも「有り難う」といふ言葉を以て答へるやうに子供の時から躡ねてありますがこれは誠に善き風習であると思ひます。幼い時は右のやうな心を何といふ事なしに日常生活に於て養はしめるやうに努める必要がありませぬ。これがやがて宗教心の要素であります。以上の注意と共に子供には人間以上の力があつて此の世の中を支配して居ることを覺らしめる必要があると思ひます。幼稚園でも小學校でも特に

時間を設けて之を教へるには及びませんが日常經驗するいろ／＼の事柄に就いて子供が人に知られさせねば如何なる事をしても恐ろしくないやうな心を起さぬやうに導いてやらねばなりません。あまり深く立ち入つて神様とか佛様とかいふことを説くことは必要もなく又時として却つて害もありませうがこの世に神佛等人間以上の力があつて吾々は知らず識らずにかういふ力の支配を受けて居るものである事は教育が先づ自ら信ずると共に子供にも信せしめる必要があると思ひます。頃日我國の犯罪に非常に慘酷の事柄の多くなつたのはいろ／＼の原因もありませうが維新以前の國民の頭を支配して居た「天道さま」とか「今日さま」とかいふ信仰の無くなつたといふことが大原因であらうと思ひます。是等の信仰の中には太陽崇拜などいふ幼稚な宗教的分子も混じて居りませうが兎に角人が知らずとも知つて居る「より高い者」があるといふ信仰からその言行を慎むことは餘程

多かつたのであります。然るに明治の教育は宗教と分離せしめると共に痛く宗教を排斥いたしました。それは固より從來の宗教には随分迷信の分子も多く教育を害する虞もあつたからであります。餘り極端に物質主義に傾きました結果として今日見るやうな恐ろしい状態になつたのであります。

それですから今日以後の教育に於ては此の原則に記されたやうな基督教的萬有神教と限ることは出来ませんが宗教心の萌芽を厚く保護してその發達を助けるやうに努めねばなりません。少くとも之を害したり特更に之を妨げたりせぬやうにせねばなりません。それにはたゞ幼稚園や小學校で先生が意を用ゐるばかりでなく家庭に於て父母が是等の事によくよく心を用ゐねばなりません。私は我國の知識階級の人が假令成立宗教は信せずとも少くとも人類以上の力を信じて敬虔の心を養ふやうになることを切望いたします。

(五) 兒童ハ本來肉體强健ニシテ生レナガラ罪障ア

ル。モノニアラズ。

これは餘程ルーンー Rousseau 1712—1778. の説の影響を受けて居ると思はれます。又或點からは遠くロック Locke 1631—1704. の學說に淵源して居るとも見えます。ロックは初生兒の心を何も記されて居らぬ白板 Tabula rasa に比しました。これは初生兒は何等の經驗なく生れてから後に感覺からいろ／＼入つて來る刺戟で一代の間に立派な發達をなすのであるといふ考から起つたのでありますから罪障といふやうな事と直接の關係はありませんが何しろ生れた時には何事もなく清淨潔白であるといふ考はかかる思想から得來つたのであります。併しこれは今日の心理學說からは承認することは出来ませぬ。人には生れながらにして遺傳といふことの爲めにいろ／＼異つた傾向がありまして萬人の心が皆白板のやうであるとは申されません。況してルーンーの説の如く人は自然のままではすべて善くして人爲の爲めにすべて悪く

なりといふやうな考は到底信せられぬ事であります。さりとて基督教で説く如くに人は生れながらにして原罪 Original-sin があつて穢れて居る者であるといふ事も信じられません。それゆゑ此の原則がルーンーやロックの立場から出たとしますれば贊成は出来ませんが若し之を以て人が當然 Dollen の事を説いたとすれば全くこの通りであります。

兩親もその兩親ももつと溯つた祖先も健康であつて悪性の病氣などなく純潔の血統を引いて居るとしますればその子供は當然肉體強健である筈です。殊に近來醫學者の實驗に由りますれば初生兒の血液の中には何等の病菌も無いといふことです。生れながらにして弱いといふのは親の身體に何等か缺點がある爲めです。精神の方面も亦その通りで生れながら罪障の存すべき理由はないのです。併し生れながらにして罪過を犯し易き傾向を有する者は決して少くないのです。所謂先天性犯罪者といふのは生後如何なる境遇に於いても罪過

を犯すやうになるのです。それゆゑ畢竟しますればここに掲げた原則は一の理想でありましてこの通りのものはなか／＼得られるものではありません。固より今日の心理學は「觀念の遺傳」などいふことは絶対に信じませぬ故罪が遺傳的に出て來ることも信じませぬ。随つて「生レナガラ罪障アルモノニアラズ」と云ふ事は文字のままの意味に於ては眞理です。ただ前に述べたやうに罪を犯し易い傾向を持つて生れて來るといふことは事實です。要するにフレイベルの時代は生理學や心理學が今日の如くに進歩して居なかつたのは勿論進化論殊に遺傳の學説は到底今日の如くに明になつて居なかつたのでありますからこの原則もその積りで視ねばなりません

○幼稚園保育の陥り易き弱點及其の起因

(大阪市保育會にては九名の保母よりなる調査委員を

設けて、此の問題につき數會の會合を重ね、調査の結果、委員諸君より左の通り同會へ報告せられたり、最も有益なる調査といふべく、京阪神聯合保育會雜誌第三十五號所載大阪市保育會記事より摘録す。)

設備上につきて

- 一、一般に遊園の狹隘なること
- 二、遊園設備動もすれば不自然的なること
- 三、園舎の設備(殊に便所の如き)幼兒的ならざる爲危険多きこと

保育者につきて

- 一、徒に新奇の説を追ひ又は極端なる舊法墨守の弊ありて自己の經驗に基きたる保育の方法を考察する自信力に乏しきこと
 - 二、動もすれば實社會の識見に乏しきが爲常識を缺くこと
 - 三、自尊心乏しき爲往々眞面目ならざること
 - 四、創意的研究心乏しきこと
- 實際上につきて

- 一、保育項目取扱上

1. 保育項目の排列動もすれば其當を失すること
2. 保育項目取扱につきて往々其著眼點を明にせざること

3. 子供の利用巧なる表出を調節せずして大人本位になり易きこと

4. 個人的に注意を缺くこと

5. 子供に餘り多くを知らしめんとすること

6. 形式的に流れ易きこと

7. 子供の興味に乗じて反面に疲勞の伴ふことに

注意せざることに

8. 干渉多きに過ぐることに

9. 保姆の言語數多きに過ぐることに

10 賞詞及消極的の言語多きに過ぐることに

11 子供に十分の働きと其動機とを與ふること少

きを以て保育に隙を生ずること

12 作業の結果に重きを置き過ぐることに

13 子供をして自己の思想を發表するに躊躇せし

むること

14 直觀方便物の不備なること

二、養護上につきて

1. 急救治療の心得不足せること

2. 子供の體格劣等なるに拘はらず其體育法の研

究不十分なること

3. 神經系統の養護を等閑に附し易きこと

4. 園醫の活動緩漫に流れ易きこと

5. 子供の身體各部の調和的發達に留意せざるこ

と

三、躰け方上につきて

1. 動もすれば命令の徹底せざる恐れあること

2. 行爲の動機を調べずして賞罰すること

3. 子供の躰け方に關し動もすれば緩嚴其宜しきを
得ざることに

右調査事項に關し其起因の重なるものを擧ぐれば

左の如し保育者は深くこれを考察して常に之が救

濟の實行に資せざるべからず

1. 保姆自身の修養足らざること

2. 因襲的思想の脱せざること
3. 社會的影響に打ち勝つ能はざること
4. 土地の狀況が然らしむるに非るか因て常に其弊を矯むることに注意努力すること

雜 錄

○全國幼稚園關係者大會

全國幼稚園關係者大會は豫定の通り八月三日より三日間、東京女子高等師範學校講堂に於て開催せられたり。全國より參集せられたる斯教育の熱心家諸君六百に達し、誠に盛會を極めたり。第一日は九時より開會、中川フレーベル會長の開會の辭、文部大臣、東京府知事、東京市長、帝國教育會長の祝辭ありつゝ、いいて議事に入り、二個の文部諮問案、及び三個の建議案に就て討議の結果、議長指名の調査委員附託となりて正午閉會。午後は各委員會の閉會あり。

第二日は午前八時開會、法學博士農學博士新渡戸稻造氏の『子供の貴さ』と題する講演あり。次に安達、林兩氏の好意による奏樂あり、其の後直に前日の委員會の報告あり。論議再び百出。議場大に活氣を呈し、熱心に討議を重ねる處あり。爲に豫定の研究

問題に入る時間なく、諮問案に對する答申書及び建議書は議長に一任せられて、此の日の議事を閉す。

第三日は本大會にとりて最も光榮とすべき新宿御苑拜觀の御許可あり、午前、各委員の先導にて拜觀。豫定の會は午後一時より開會、研究問題及び會員談話について各地參會者諸君の研究報告或は意見發表あり。四時より文部省普通學務局長田所美治氏の幼稚園教育に關する講演あり。つゝいて中川會長の開會の辭、會員總代として神戸の榎本常氏の挨拶あり。茲に無事此の大會を終せり。

其の夕、席をあらためて會員懇話會あり、田所普通學務局長、來賓の各府縣女子師範學校長諸君其他も加はらる。京都淺尾清紀氏の今秋御大典を期して京都市に開かるべき教育大會に關する紹介あり。簡單なる夕食の後、餘興薩摩琵琶あり。會員懇話としてベラ・アルキン嬢のモンテツッリー教育の實地視察談あり。次に岸邊福雄氏の巧妙なるお話あり。興を盡して八時散會。尙ほ詳細なる記録は來月號に掲載せらるべし。

○フレーベル會講習會

本會講習會は大會につゞき八月六日より開會豫定通り二階堂、三田谷、久留留、貞羽諸講師の講義或は實習あり、また九日には乙部教授の科外講演あり會員百七十餘、最も盛會なりき。

ビュウロウ
夫人の

フレールベル追懷錄

S K 生 譯

九 ヒーケ博士の來訪

或國に於ける斯の如き實際的の創始は他の國々に急速な結果を興へない筈はありません、それに就て私は獨逸が眞先に進んで行く國であらんことを望みます、獨逸に於てはこの事は既に私人の手によつて指を染められて居ります。

この種の教育改革はフレールベルの教育法の結果であると言ひ得ない、目下の教育界の狀勢によつて切に要求されて居りますのでその實現に太して時日を要する筈はありません。

私が今就て語つて居る頃(一八五一年)にはリールペンスタインの私達のサークルの中にはフレールベルの主張に對して信を置いて居る人は極めて少數でありました。而してその頃の學校當事者は直接

に實際的でない物は何でも進んで研究するなどといふことを滅多にしませんでした、それ故にヒーケの意見は一層獎勵的でありました。

婦人達は男子達に較べると改革に對しては遙かに熱心でありました、それに多分婦人達は前途に横る困難をよく理解してゐなかつた爲めでありませう。若しワイマルの公女が彼の様に早く世を去られなかつたならば公女の援助によつて第一の企圖は行はれたかも知れません、何故ならば公女はフレールベルの主張に強い興味を懷かれて居たのみならずフレールベルの説の實行に持ち來されるのを見るべく非常に熱心であられたからであります。公女をお訪ねした時丁度ヘッセン、フィリップス

シュタールの伯爵夫人が來合せて居られたことがありました、而して話は幼稚園及び幼稚園事業擴張のことに移つて行きました、伯爵夫人はこの時深く興味を起されましてフレーベルの方法を御自身の家族の教育に應用なさらうと決心されました。

伯爵夫人の小さいお孫さん、即ち現伯爵のお子さんは四歳になりますが病的であまり賢くない性質と見え發達も鈍く他の子供達のするやうな普通の遊戯をなさいませんでした。而して何時も無感覺的にボンヤリとして居られました。

私達の會話のあつた翌日、伯爵夫人はフレーベルを訪れました、而して幼稚園の實際的の仕事を詳しく知り又實際的の仕事の據つて居る原理を學んだ後伯爵夫人は當時勉學中であつた生徒の一人を學業の終り次第小公子の教育者としてフィリップスシュタールへ聘へることをフレーベルと約束しました。

フレーベルは女皇の明斷を非常に欣んで居りました、而してこれが元となつて社會の上流階級に彼の方法が廣く認めらるゝことを望んで居りました。

ヒークが私と共にマリエンタルへ行つた日、午後例の問題に就て長い議論をした後フレーベルは心配のためでしたか疲勞のためでしたか平常と比較べて分り難い物の言ひ方をして居りました、けれども彼の方法の實際的適用に就ての説明は充分ヒークに認められました、尤もそれは彼の教育學の本領からは離れて居るものでありました、それで基本の原理が意見の中に現れかけて來ると相互理解は幾分か破壊されました、而してヒークはフレーベルの所説に嫌らなくなりました、同時にフレーベルは益々それをよく説明することが困難になりました。

リーベンスタインへの歸途に於てヒークはフレーベルの教育法の哲學的基礎が彼には満足出來な

いと言ひました、ヒークは殊に或る一點即ちフレールが立つて居るらしく見えた子供は生れながらにして必ず善良な性癖を有して居るといふ假定に賛成が出来なかつたに違ひありません。

私ははつきりとこの事を否定しました、けれども私は斯る誤解がフレールの爲したやうな敘述から起つて來るのは當然であるといふことを認めなければなりません。私は次のやうな言葉でフレールの主意を彼に告げやうと試みました。

「人類の性癖は自から發達してあらゆる方面に於て善良にして且つ完全なるもの——神の姿となるやうに神意によつて定められて居ります、それ故に是等の性癖は、結局邪惡であらう筈がありません、何故ならば是等の性癖はこの天命を實現すべく、神によつて與へられて居るものだからであります。

フレールはその著「人間教育」の中で次のやうなことを言つて居ります。

それ自身に於て、惡なる性質といふものは、若し吾人が限りあるもの、形あるもの、果敢なきものを惡なる性質の本性及び結果に於ける惡であると考へないかぎり、人間の内に發見することは出来ないものである、是等はその必然の根底を人間の豫定の目的に於て意識ある理性と自由にまで持つて居る。人間は善良となるべく正直となるべく有徳となるべく間違をも爲し得なければならぬ。自決及び自由を以て神聖なるもの及び永久なるものを制定しやうとする人は誰でも有限な現世のことを爲すべく許されてあらねばならぬ。神が有限の内に自分自身を知らしめやうと望まれた故にこれは有限に於て爲されなければならぬ。一時的であるすべてのもの、個人的であるすべてのもの、それ自身に於て有形の惡であるすべてのものを求める人は誰でも自然そのもの、被造物を蔑視するものである。即ち約言すればその人は或る特殊な意味に

於て神を冒瀆するものである。

私は附加へて言ひました。合理的存在として彼自身を發達させるために人々に必然的に與へられて居る意志の自由が移り氣や間違によつて人々の力の正則な發達を妨止しましたので人々はこれによつて神の法則とは反對な不法の路に導かれ人間の墮落にまで連れて行かれたのであります。」

フレーベルが如何に深く教育に於けるこの事實を考察したかといふことは彼の「母と愛子の歌」に於ける一例からも看取することが出來ます、彼はこの歌の本で避け難き事實として子供の墮落に言及し健全な經驗としてその適用を指示して居りません。

フレーベルは正當な尋常な發達の仕方から乖離して行くといふことは人間の性癖の本性に影響變化を及ぼして來たに違ひなく又今も現に影響變化を及ぼしつゝあるといふことを決して否定しません。

是等の結果は動物や植物の世界に於ても見られます、注意や修練の缺乏といふことは高等な家畜例へば馬の如きに於てさへ劣等な後繼を生せしむる原因となります。又培養を怠るときは草木も完全な果實を附けません。而して遂には種子の退化に赴くのであります。けれども之に反して適當な注意と修練とは動物界及び植物界の種子を改良し向上させ惡化したるものを元通りに直します。

フレーベルは教育者が子供を善且つ純なるものとして（少くもこれ等と反對な性質が現はれるまでは）取扱ふべきであると要求して居ります、何故ならば最初の過疵若しくは個的の墮落が両親や祖先から種々の性質を受け繼いで來る居る子供に於て及び私達が罪惡と呼ぶ所の誤謬の諸形式の起つて來る種々なる結合に於て現れて來るのは何時であるかといふことを誰も知ることが出來ないからであります。生得の性癖も亦子供を取巻いてゐてその發育教化に有益若しくは有害である所の感

化によつて矢張同じ様に變化させられ形造られま
す性癖それ自身は孰方の方向にも發達しない前は
善でもなければ悪でもありません——性癖は事情
によつては善にもなり悪にもなる所の種子であり
ます。すべての子供の両親や祖先によつて幾分悪
くされて居る所の神によつて定められた善に向つ
ての性癖があります、而してこれは種々なる變形
を以て丁度體質の虚弱、病氣に罹り易い傾向が遺
傳せらると同じやうに子孫に遺傳せらるゝのであ
ります。遺傳せられた缺點には精神的のものと肉
體的のものとがあります、けれども是等の缺點弱
點にも尙且善良健全なる性質が發見せられます、
遺傳せられた罪の傾向にも人類に於ては遺傳せら
れた徳の傾向が見出されます。

しかしながら今茲に罪ある家族が誤用せられた
力と性癖との遺傳を示すといつた所で直ちに犯罪
人の子供は皆その両親の足跡を踏んで行くもので
あると推斷してはなりません、之を善良な道德的

の雰圍氣の中に置いてよく教育したならば犯罪人
の子供と雖も高尚な有用な人間となり得るであり
ませう。極悪の家庭に育つた子供でもその眼に一
寸見入るならば私達は人類の常に靈的に更生せん
とする力を疑はなくなるであります、若しさう
でなかつたならば贖罪といふ基督教の思想は意味
を爲さないことゝなります。

すべての時代によつて従つてすべての時代の各
個人によつて承認せられた進歩的の教養は個人が
否個々の國民が數千歩も後れて居るに係らず漸次
人の惡を絶滅して行くに違ひありません。而して
罪惡によつて損れてゐた性癖はその原始の清淨
に於て高められ回復せさせられるに違ひありませ
ん。

この事は地上に於て如何なる程度まで可能であ
るか、神によつて定められた惡よりの究極の實際
的の請戻しと地上に於ける人類の可能的の完全と
が成就せらるゝために如何なる歴史的の行爲と神

の啓示とがこの目的のために今まで働いて来たか
又未來に於て働くであらうかといふことは他の問
題でありましてこの問題の解決は基督教的見地に
於ては否定されたり危ぶまれたりすることはあり
ません。すべての深遠な思想を否定する現代の生
嘯り説にはフレーベルは少しも關與しませんでし
た、若し基督教思想の深奥の核を掴みその恒久の
眞理に參した人があるとしたならばそれはフレー
ベルであります。彼は或る論說の中で次のやうに
言つて居ります、「神と人との關係は基督教によつ
て確然として餘蘊なく永久に決定せられて居る」
基督教のこの恒久の眞理が未だ極めて少數のもの
にしか知られてゐないために、多くの世紀の無數
の誤解によつて隠されてゐたために、而して神が
私達の信仰の内容が明かにせらるゝことを望まれ
る故に救ひの新しい手段がその目的のためにこの
世に現れなければなりません、眞に人類の本性に
適合する善き教育がこの救ひの手段に屬するとい

ふことは論ずるまでもありません、特に——フレ
ーベルの場合の如く——人類進展の法則が認知せ
られ適用される時に於てはさうであります。フレ
ーベルは正路から離れることの危険と最初の發育
に於て人の性質はねぢけたものとなされ得ること
を認めて居りましたので彼は極めて幼い子供の教
育を最も重要であると考へました、若し子供とい
ふものが完全に善且つ純なる性癖を以てこの世に
生れ出で來さへするならば幼時の教育的感化とい
ふことは不必要になつて了ふのであります。教育
は餘計なものとなつて了ふのであります、何故な
らば人間の性癖や力はその時こそその本性に従つ
て自發的に精確に進展して行くでありますか
ら。

けれどもフレーベルに據ると子供のよき性癖と
いふものは罪も惡も存在してゐないのに殊更これ
を存在すると考へることによつて容易く善の反對
となるといふ危険に處るものであります、例へば

子供の心になく不信實を想像する如きことであります。茲に於て子供は時至らずその反對がはつきりと現れる前にその無邪氣を奪はれるのであります。フレーベルは教育者が子供の善と純とを認め試験的に進み子供を目するに小悪魔を以てしないやうにと要求します。

神學的哲學的研究及び深き真理を知らんとし、ての調査の意義と重要とを否定しないかぎりは子供と遮民の直接實際の教育に關してはこれまで少しく得る所があつたといふことは認められなければなりません。

言葉のみを以て現された真理は道德的な人を作るべく充分ではありません、結果として生ずべき自由な道德的な行爲を保證するには道德的の練習が必要であります、是等の道德的練習の活用は目下の教育法では不充分であります、フレーベルは是等のことを紹介すること及び行爲と創造とを教育といふ言葉の代用とすることを望んで居ります。

す。

現代の意識なき存在の内にも勢力を及ぼして居る理性を發見せんとする努力、人間と自然及び人間に從屬する諸機關との關係を發見し樹立しやうとする努力は確かに神によつて意志された發達の或る點を示します、而して人が長い間自然から隔離してゐたことに向つて人道を補ふべく役立つであります。

フレーベルは實在の事物(神の作つたもの)の智識に彼の出發點を取つて居ましたので彼は矢張同じ方向に進んで行きました。彼は言葉に於ける真理と言葉(教義)を通じての真理とは一つの啓示が他の啓示を確定する(啓示はすべて神に於て共通の起原を持つて居りますから斯うなくてはならないのであります)時に於てのみ於明かなる光に浴し従つて於深く理解されることが出来るといふことを深く信じて斯く行つたのであります。フレーベルのよくいふ「自然の子」として人類の深い智

識は育つて行かうとする悪を發見して之と戰ふには最も善き手段であります、何故ならばこの惡といふものは人の現世的存在の中に在つて精神的存在の中にはないからであります。

フレーベルは確かに哲學體系などは樹立しませんでした、少くも言葉に於て斯るものを作りませんでした、けれども深き哲學的宗教的世界觀は彼の「人間教育」の基礎に横つて居ります又幾分かは、人間の心の思想を物質界(神の世界)に於けるその起原にまで連れ戻つてそのシンボルを供給する所の、彼の教育の手段の中にも具象せられて居ります。

現存の哲學諸體系の出發點とは異つた出發點を有して居るにも係らずフレーベルはそれがために諸體系を敵視して居るものではありません、少くも有神論の立場に立つといふ點に於ては決して相容れないものではありませんでした。彼は出發點を異にして居るにも係らず特に多くの點に於て哲

學者クローゼの意見と一致して居ります。

純なる人間の本性の智識によつて(事實に於てこの智識は衰へ且つ不分明であるにも係らず)彼は基督教に於けるこの純なる人間の本性の表現と充分に一致する實際的教育に向つての正しい目標を樹立したいと望んで居ります、斯くして出来るならばこれを無意識の時代に於ける若しくは幼兒期の本能的人間生活の間に起る誤謬から保護したいと望んで居ります。

教育の新體系の是等の根本原理及びこれに相當する實際的手段はフレーベルによつて興へられました。是等の基礎の上に彼の智的後繼者等は現在の惡求に應ずべく建て足して行くことが出來ます人の一生は多くのことを爲すに充分ではありません。この問題は於廣き^{あち}一般的の宇宙觀を得んとする現在の智的努力が満足な結果を得るまでは充分に解決せられないであります、その間に於てフレーベルの思想の意義がフレーベルの祖述者等の

註釋に於ては、なくそれ自身に於て及びその更に進みたる進展に於て求められることは非常に重要であります。

ヒークとの長い會話が濟んだ時、彼はフレーベルの「人間教育」を研究しその主張を熟知して丁ふまでは自分の判断を中止するといふ約束をしました、同時に彼は彼が實際的手段と充分一致して居ることを示しました。

彼がリーベンスタインに滞在してゐたのは短い間でありましたのでその時これ以上に深く立入つて調べることは出来なかつたのであります、グリーフスワルドの高等學校の校長として彼の新しい地位の受容が彼を招き去りました、而して長い間の彼の全活動を要求しました。尙その他彼の生涯の短かつたことはその主張を更に深く研究することを彼に得せしめませんでした。若しさうでなかつたならばこの深刻な心がフレーベルの主張の愉快な印象を受けた後に於て、正當な判断を著書とな

して殘して行かなかつたといふことは不可思議なことゝなるでせう、尤も職業への専心や反對の方へ引張つて行く興味のために或る主題の包括的な視察をすることの出来ない場合には生々した熱心な同情も遂には失はれて行くといふ例も尠くはありません。

フレーベルの著作の一樣に入念であることは、兎に角種々な仕事を法外に重荷づけられて居る諸専門家に取つてフレーベル教育法の研究を容易ならしめたであります、而して彼等がそれを理解すべく非常な助けとなつたであります。



小野鷺堂 著 ▲增訂 女子手紙文

和裝全一冊 正價五十二錢 郵稅六錢

落合直文著 ▲女子 雁のゆきかひ

和裝全一冊 各金五十六錢 各郵稅六錢

伊藤文子著 ▲裁縫おさいく物

和裝全一冊 正價九十二錢 郵稅八錢

伊藤文子著 ▲裁縫おさいく物續編

和裝全一冊 正價九十二錢 郵稅八錢

神田順子著 ▲裁縫新教授書

和裝全一冊 正價九十六錢 郵稅八錢

吉次郎著 ▲女子 技藝 揃み細工全書

和裝全一冊 正價九十八錢 郵稅八錢

森本義子著 ▲家庭編 物全書

和裝全一冊 正價八十二錢 郵稅八錢

金子支江子著 ▲家庭編 花術全書

和裝全一冊 正價八十五錢 郵稅八錢

木村淡香著 ▲編物圖案集

和裝全一冊 正價五十五錢 郵稅四錢

國分操子著 ▲家庭婦 女寶鑑

和裝全一冊 正價五十五錢 郵稅四錢

青木歌子著 ▲新體 女子文範

和裝一冊 正價六十八錢 郵稅八錢

關根正直著 ▲筆のゆきかひ

和裝二冊 各正價五十六錢 各郵稅六錢

坂正臣著 ▲女子文の山口

和裝二冊 各正價三十五錢 各郵稅四錢

關根正直著 ▲文筆のあや

和裝二冊 各正價四十五錢 各郵稅六錢

吾妻勝剛著 ▲お産の心得

和裝一冊 正價八十八錢 郵稅八錢

寺崎廣業著 ▲我子の生立

和裝一冊 正價四十五錢 郵稅十二錢

大澤謙二著 ▲通俗 結婚新說

和裝一冊 正價二十二錢 郵稅十二錢

大倉保五郎著 ▲實用家計簿

和裝一冊 正價二十五錢 郵稅六錢

女子手藝 普及會編 ▲裁縫小物全書

和裝一冊 正價八十二錢 郵稅八錢

伊澤峰子著 ▲家庭 實用小兒洋服裁縫全書

和裝一冊 正價三十錢 郵稅八錢

山田きよ子著 ▲袋物細工の枝折

和裝一冊 正價一圓十錢 郵稅八錢

種村なかり著 ▲西 蕨子著 ▲手藝 九重編造花法

和裝二冊 各正價七十五錢 各郵稅八錢

野村文學著 ▲應手 工圖案

和裝三冊 各正價四十錢 各郵稅四錢

發行所 東京日本橋 大倉書局 振替電話 東京四〇四 二〇四 三四一 番

顧問 高島平三郎先生

モドコ

此の月刊「繪ばなし」は幼い女の子にも男の子にも誠に良いお友達である。さし繪の綺麗なる事と片假名にて記事の教育的なるとは讀んで面白く大に爲になる家庭向の雑誌なり
◎子供を愛する家庭にはなくてはならぬ讀物なり

定價一冊金十錢郵税 最寄書店になくば
毎月一回 五厘六冊郵税共金五 本社へ御申込あれ
一日發行 十八錢十二冊 郵税 御注文は振替貯金

共金一圓十錢(前金) なければ尤も便利也
●郵便切手代用一割増●

東京小石川林町五七
振替東京二七九六三

コ
ド
モ
社



の一本目 年幼本白

報畫の供子き白面くし美

文學士 倉橋惣三 先生 監修
繪畫は 六畫伯の執筆

◎可愛いお子様を

美しく善く育てたいと思はれるお母様方の爲めに深い注意と多くの苦心を重ねて理想的に編輯せられ今度新たに生れたのはこの日本幼年です

◎可愛いお子様に

お與へになつて玩具やお菓子よりも喜ばれ面白がつて楽しむ間に感情を高尚にし美しき習慣を養ひ清き心の糧となるのはこの日本幼年です

◎可愛いお子様が

幼稚園から尋常小學でお習ひになつたことを喜び笑ひ興する間に知らず識らず復習し補習するのはこの日本幼年です

◎最後に お母様に

御注意を願ふのは日本幼年は文學士倉橋惣三先生の監修で六畫伯の彩筆になり紙數も多く印刷も鮮明で従來有りふれたものに全然超越して居ることです

◎定價 第一號部 十錢 前金 半年前金六圓十三錢

婦人畫報 少年畫報 少女畫報 日本幼年 發行所 東京 社 東京市京橋區鍛冶橋外 振替東京二一八番

幹主子とも仁羽

子供之友

婦人之友社が年來の宿志によつて、昨年四月から出して居ります十分教育的なる子供雑誌で御座います記事も挿畫も子供の喜ぶものばかりです。楽しんで讀む間に、頭腦をよくし感情を高尙にし、善良なる習慣を愛するやうになります。『子供之友』には、一つの非教育的なる挿畫も、一行の不注意なる文章もありません。『子供之友』は、家庭教育の最も有力なる補助機關であります。幼稚園及び小學校時代の御子様方のために、熱心によき讀物を求めて居らるゝ御家庭におすゝめ致します。

定冊價 十一錢 半郵 分税 十錢 婦人之友社 東振替 京一六 雜六 司六 谷番

フレーベル會規則 (抄)

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノトス

第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ齎出スベシ

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一、總會、毎年十月之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品、幼兒成績物展覽、會務ノ報告等ヲナス

二、常會、毎年二月、六月、ノ第二土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス

三、組合會、會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組織ス

但シ別ニ組合規約ヲ定メテ會長ノ承諾ヲ經ルモノトス

一、雜誌發行、毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス

二、前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

中川謙二郎

本會幹事

(イロハ順)

本會評議員

(イロハ順)

本會客員

(イロハ順)

菅原 敬造氏

東 基 吉氏

櫻井 光華氏

小西 信八氏

松本 孝次郎氏

井村 くに 池田 トヨ 坂内 ミツ
大瀧 晴 和田 實 和田 くら
倉橋 惣三 安井 哲 福田 ふく
小向 きみ 雨森 劍 坂井 ふで

乙竹 岩造氏 吉田 熊次氏 田中 ふさ氏
野口 幽香氏 榎山 榮次氏 藤井 利譽氏
下田 次郎氏 日田 權一氏

伊澤 脩二氏 巖谷 季雄氏 岩谷 英太郎氏
波多野 貞之助氏 細川 潤次郎氏 本間 辰藏氏
戸野 周次郎氏 大瀨 甚太郎氏 奥好 義氏
尾田 信忠氏 大久保 介壽氏 嘉納 治五郎氏
唐澤 光德氏 谷 本 富氏 高島 平三郎氏
棚橋 源太郎氏 多田 房之輔氏 田中 敬一氏
中島 力造氏 中村 五六氏 野尻 縉一氏
野上 俊夫氏 久留島 武彦氏 松本 亦太郎氏
松本 孝次郎氏 馬上 孝太郎氏 富士川 游氏
小西 信八氏 淺岡 一氏 笹部 顯宜氏
櫻井 光華氏 三島 通良氏 篠田 利英氏
東 基 吉氏 瀬川 昌香氏 尺 秀三郎氏

菅原 敬造氏

幼稚園用保用品

- 一、恩物
- 二、手藝品
- 三、新案手藝品
- 四、モンテッソリー教具
- 五、運動用具
- 六、遊戯用具
- 七、標本模型
- 八、設備用品
- 九、裝飾用品
- 十、おみやげ用品
- 十一、書籍繪畫類
- 十二、諸表簿證書類
- 十三、普通玩具類
- 十四、其ノ他一般ノ用具材料

● 幼稚園用品は家庭玩具としても亦普通玩具に冠絶す

東京麹町區三番町

フレール館

(電話番町二九九〇)
(振替東京一八九六〇)

フレール館の
新製品

春駒

一、製造の由來——此の春駒は東洋幼稚園長岸邊先生の御創案にして御使用後増々其の効果の偉大なるに驚かれつゝある運動具なり。

一、使用遊戯——騎兵の操練、騎兵の戦闘、競馬等に用ひて兒童勇躍の狀を想見せられよ。

一、出來方——馬首の形に板を挽き之に象箠を以て表象し丈夫なる棒を附して末端に二個の車を附し且つ首の付け根に四尺の紐を以て首に掛くる様にす之れ戦闘の際軍刀を持つ時手を馬より離し得る爲めなり。

定價五十錢 送料實費ヲ要ス

明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可(毎月一回五日發行)

婦人と子ども 第十五卷第九號

大正四年九月五日發行
大正四年九月五日納本済

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場